

ラブライブリスタート
シリーズ エンジェル
パーティータイム

しゅみタロス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「夢を叶えた少年、夢を追いかける少女たち。彼らは夢の先に何を見る?」

流星苑高校に通う地元動画配信者。黒猫団のリーダーである主人公 海道陸（かいどうりく）は1年ぶりに中学時代の親友、高海千歌と再会をする。スクールアイドルを目指す彼女の想いを受け入れ、黒猫団はスクールアイドルを支援する事になるのだが

……

新たな青春ジューブナイルストーリーの幕が開く。それは天使の祝福。

※素人が書いてるので誤字脱字あります。

※前作にまつわるネタがありますので前作を読んでは話が理解できません。

※物語はほぼオリジナルで構成されています。本編未視聴でも安心です。

目次

スピントフ

風間ジュンヤと悦楽のオールグレイ

1

風間ジュンヤと黒色のバラード

8

シリーズ1

第1話 本当の自分自身に出会う為

14

第2話 英雄S／彼女は風を奏でる。

21

第3話 紅とロイヤルローズ

30

第4話 墮天使と狼の邂逅

39

第5話 本格始動と見えざる影

46

第6話 マーメイドの語る夜

54

第7話 キングダム・ワルツの夜

63

第8話 何事も対人関係は形から入る

物 71

第9話 消失の夢／明日を取り戻す少

女 79

第10話 スカーレット・ナイト・ム

ン 87

第11話 プロテインコンビの恋愛方

程式 94

			第12話	追憶の王と円盤人形の旋律	
			者。		
			第13話	夢への序曲	100
			シーズン2		
			第14話	黒の世界	106
			第15話	家電量販店はロマン!!ゲ	112
			ム買おう!!		
			第16話	マリーの甘美な世界	118
			第17話	ダイヤモンドツインテール	
			第18話	心咲ファンサービス	129
			...		
			第26話	海色の二人 重ねる心	183
			第25話	桜の訪れを終わりの前に	189
			第24話	レンズの先の本音	
			第23話	終わりの近づく今の関係	177
			...		
			第22話	少しでも君に近付いたら	171
			日常		
			第21話	冬休みの喧騒とありふれた	163
			第20話	天使の世界	157
			第19話	一つだけの約束	149
			第19話	一つだけの約束	143

スピノフ

風間ジュンヤと悦楽のアールグレイ

とある春休みの事

黒猫団スタジオ

シユーカーチャツ

手慣れた手つきで紅茶を淹れる風間ジュンヤと横でチーズケーキを皿に乗せる海道陸。

二人は3年生への進級を控え、それぞれの道に進んだ黒猫団たちとは現在離れてい

る。

陸「大分静かだな」

ジュンヤ「今はね、またその内賑やかくなるさ」

ティーカップに注がれた紅茶を嗜みながら陸は話を切り出した。

陸「それよりも、冬休みの間にイギリスに戻ったんだらう？ルビイも連れてさ」

ジュンヤ「ああ、黒澤家と話が進んでね」

陸「やっぱり、結婚とかするの？」

ジュンヤ「まだ早い話だよ、ただ両家公認の関係になったことについては否定しないが、この事は当然イギリスにいる父さんにも話しておく必要があったからね」

ジュンヤは紅茶を啜ると穏やかな表情で陸に聞く。

ジュンヤ「聞きたくないかな？イギリスでの話」

陸「聞かせてもらおうか、少しは紅茶がうまくなりそうだからな」

4日前

イギリス ロンドン

ガラガラ

ルビィ「ジュンヤさん!!見た事も無い物があそこにも!!」

ジュンヤ「楽しそうだね、でも好奇心であんまり離れないように」

物珍しそうに空港のあちこちを見渡す黒澤ルビィ。

ジュンヤはトランクケースを2つ抱え、ルビィと共にエントランスを出る。

ルビィの視界に広がるのは映画の様なレンガの建物と巨大な時計塔。

ルビィ「本当に来たんだ……イギリス」

ジュンヤ「向こうで僕の家の使用人が車を手配している、待たせないように急ごうか」

ブロロロ

黒いビートルが唸りを上げながら二人を乗せて公道を走って行く。

ルビイ「まるでファンタジーみたいだ、お店も沢山ある」

使用人「気になる場所がございましたら、何なりとお申し付けください。荷物も持ちいたしますよ」

ルビイキラーン「いいの!!」

ジュンヤ「僕も付き合うよ、陸にお土産頼まれてるんだ」

使用人「それでは」

それから車を降りた3人はイギリスの色々なお店を見て回る。

洋服、アクセサリー、ぬいぐるみ、お菓子、喫茶店。

目に映るありとあらゆる物を買って込んだ後、二人はジュンヤの屋敷へと向かった。

ルビイ「ここが、ファンガリオン家」

赤レンガの壁と尖がった屋根、まるで魔法使いの屋敷のような不思議な建物。

ジュンヤが扉の前で取っ手を2回鳴らすと奥から老人が現れた。

???「おお、孫よ。よく来たな」

ルビイ「さ、サンタクロース!!」

ジュンヤ「そう思われても仕方ないと思うけど彼は……」

老人は優しい顔でルビイに手を差し伸べる。

老人「ジュンヤの祖父のクロローゲート・ファンガリオンだ。覚えにくかったらサンタでも構わんぞ」

ルビィ「黒澤ルビィです、よろしくお願いします」

クロロー「外は寒いし、長旅で疲れただろう。中に入りなさい」

家に入ると中には彫刻や絵画などが飾られ、使用人が常にいる、ルビィはここでの生活は恐らくホテル感覚じゃないと慣れそうにないと思いつながら広間へと案内された。

そこにはアツプルパイやクツキー、チョコレートケーキなどが並び、3人の人物が座っていた。

クロロー「私の家族だ、紹介しよう」

「ジュンヤの祖母、フィーニスラルク・ファンガリオンです。仲良くしてね」

「ジュンヤの父、風間巖角だ。日本人だから気軽話してくれ」

「ジュンヤの母の風間・シエステイー・裕子・ファンガリオン。裕子と呼んで、ルビィちゃん」

ルビィ「黒澤ルビィです、よろしくお願いします」

ジュンヤ「それじゃあ、席について。お茶会を始めようか」

机の上に並べられたお菓子を嗜みながらルビィはジュンヤとの1年間やスクールア

アイドルの事について話した。

皆まるで孫の様に優しくしてくれるため、ルビイは自然と打ち解け合いながらお茶会を楽しんだ。

そこからしばらくして。

自分の寝室に戻ろうとした時だった。

ジュンヤ「ルビイちゃん、ちよつといいかな？」

ルビイ「ジュンヤさん？」

ジュンヤの手にはアンティークのカギ、ルビイを誘うと屋敷の奥へと案内した。

ルビイ「ここはどこに繋がってるの？」

ジュンヤ「先祖代々、ファンガリオン家に認められた者にしか入れない場所さ」

扉の前に、ジュンヤはカギを差し込み、その扉を開ける。

その先には……

ルビイ「凄い……」

ジュンヤ「ファンガリオン家の舞踏会場だよ」

大きなレコードプレーヤーを動かしルビイの前でジュンヤは手を伸ばした。

ジュンヤ「今宵、僕と一曲付き合ってくれないかな？」

ルビイは心からのジュンヤの誘いに優しく手を取った。

ルビイ「お願いします、ジュンヤさん」

穏やかなクラシックと共に手を取り合つて舞い踊る。

ルビイ「すみません、私、下手だよね？」

ジュンヤ「大丈夫、僕がエスコートするから」

初めてのルビイちゃんとのイギリス

それは自分にとっての初めてでもあつたのさ。

陸「へえ、随分と幸せな話だな」

ジュンヤ「その後、正式に黒澤家とちやんと関係を持つ事が出来たのさ」

陸はジュンヤの話を聞いてふと思うのだった。

陸「俺も、千歌あいつの役に立ってるんだらうか？」

静かにチーズケーキを手で持つて齧る陸にジュンヤは答えた。

ジュンヤ「時には、見返りの無い愛も悪くないんじゃないかな？それに、彼女は陸の近くに居るのが幸せなら、十分陸はそれに答えている。悩む事はない、そうでしょ」

陸はジュンヤの言葉を聞いて、吹っ切れたようだ。

陸「考えても仕方ねえ、俺のやり方でやってみるさ」

鞆を手に玄関に向かうリクを笑顔でジュンヤは手を振り、送り出す。

陸「春休みが明けたら俺は東京のディスク・ドール・シンフォニクスで修行だ、大きくなつて帰つて来るからな!!」

ジュンヤ「僕も近いうちに東京で新しい生活を始める予定だ、お互い頑張ろう」
パンツ!!

互いにタツチを交わすと陸はスタジオを後にするのだった。

それは、新たな始まりへの序章である。

風間ジュンヤと黒色のバラード

アクアがラブライブで優勝して1年が経ち、季節は秋に染まっていた。そしてここ、東京の表参道にジュンヤとルビイが降り立つ。

ルビイ「ここが表参道、空気が澄んでて気持ちいい」

ジュンヤ「どうする？街を散策するかい？」

ルビイ「あー、そうしたいんだけどジュンヤさんの仕事の事で来てるから、お姉ちゃんに迷惑かけないようにして」

ジュンヤ「あはは、それは大変だね」

本当はルビイちゃんには仕事の事はあまり気にせず遠出を楽しんでほしいが、気を使ってしまっているのか、少し不憫に思えてしまう。そうジュンヤは思いながらフオローする。

ジュンヤ「それじゃあ、仕事終わったら晩ご飯は外食にしようか」

ルビイ「外食!!」

一瞬で眼が輝きを取り戻す、とりあえず心配はなさそうだ。

ジュンヤはルビイちゃんの手を引き、歩き出すのだった。

ジュンヤ「ここだ、久々に見たよ。この建物」

赤いレンガ造りの大きな建物、ここは先祖代々フアンガリオン家が管理している別荘の一つ、かつては風間一族がフアンガリオン家をもてなす為に作った西洋風の酒場であり、建物の上階には宿泊スペースもあるなど当時としてはとても贅沢な建物だった。

ジュンヤは鍵を開けて中へと入る。

ルビィ「凄い……異国の地に来たみたい……」

4つの巨大な木製のテーブル、完備されたガスコンロ、カウンター席や特設のステージやピアノなど、目に見えるモノはどれも時代を感じさせる。

ジュンヤ「来る前に地元の内装業者に掃除を頼んでおいた、後は電気を通すだけ」

そうやってジュンヤはブレイカーを上げると照明がつき、ランタンの様な暖かい光が空間を包む。

ジュンヤ「さて、仕事を始めようか」

ジュンヤはそう言うのと運んできた大量の家電や食器の箱を開けた。

ルビィ「これが、こうで……」

食器をそれぞれ棚へとしまっていくルビィ、ジュンヤはその後ろで厨房のオープン

取り付け、稼働させる。ミキサの管理やお湯のポッド、グリルや炊飯器をそれぞれ設置していく。ルビイも調味料のコンテナを台車で運び、奥の貯蔵庫に置いた。

ルビイ「はあ、これで良し。ん？」

貯蔵庫を出た時、キッチンの下に謎の黒い箱が落ちていた。

ルビイ「なんだろう？」

ジュンヤ「どうしたんだい？」

準備が終わった頃、ルビイの手にした黒い箱を見る。

ジュンヤ「それは……」

ルビイは好奇心のままに、箱を開いた。

ルビイ「オルゴール？」

黒い箱の正体はオルゴールであり、ぎこちないが音楽を奏でている。

ジュンヤ「このメロディーライン、どこかで……」

ジュンヤはPADを取り出すと電子化されたフアンガリオン家の楽譜を手にする。

楽譜を目で追ったその先にジュンヤは驚愕した。

ジュンヤ「黒色の……バラード……」

ルビイ「え？」

ジュンヤは驚愕すると同時にオルゴールを再び再生すると一音毎に音符を書き綴る。

ジュンヤは書き終わるとルビィに語り出した。

ジュンヤ「正直、今僕の心はぐちゃぐちゃになってる」

ルビィ「どういう事？」

ジュンヤ「オルゴールの中の歯車に名前が彫られてるでしょ？」

ルビィはその歯車に彫られた名前を凝視する。

ルビィ「キョウノスケ・カザマ……シエリーファンガリオン？」

ジュンヤ「僕のひいおじいちゃんだ、風間家の一人にして、第二次世界大戦で日本兵として戦って死んだ。悲劇の奏者、シエリーファンガリオンはひいおばあちゃんです3年前に亡くなり、遺品も何も残って無かった。あるとすれば、続きの無い楽譜。それがファンガリオン家の大きな遺産の一つ……」

それが、黒色のバラード。歴史から消された哀しき恋の歌。それがこのオルゴールで全て完成した」

ルビィ「そんな大事な物が、どうしてここに……」

ジュンヤはふと思いつく。

ジュンヤ「この建物は構造的に爆撃を受けてもビクともしないほど頑丈だ、もしかしたら。ひいおばあちゃんはこの場所に避難してひいおじいちゃんを待ってたのかも知れない。」

二度と帰らない人を、この焼け野原の日本で……」

ルビイは締め付けられる様な事実にも声が出なくなる、ジュンヤはルビイの頭を自分の胸に寄せた。

ジュンヤ「ルビイちゃん、黒色のバラードはファンガリオン家の人たちにとっては悲劇の曲と言われているが、歌詞の中にこんな言葉がある。

暗闇に落ちてても、手を伸ばせば光があり、悲劇と救いは表裏一体、人の人生にはなくてはならないもの。

だからひいおばあちゃんは決して後悔して無かったんだと思うよ。

出会っても……別れも……」

ルビイ「ジュンヤさん、私から、離れないでくださいね……」

ジュンヤ「もちろん、離れないよ」

ジュンヤは完成した楽譜の最期のフレーズを見て誓うのだった。

この私が滅びようとも、愛は受け継がれ、この先で惹かれ合う我が血族に、女神の祝福があらんことを。

ジュンヤ「この場所で、繋いでいけるといいな。ファンガリオンの物語を」

その後、カウンター席も横に飾られたロイヤルローズと共に、あのオルゴールも飾られていた。

ジュンヤとルビィ、2人の写真と共に……

シリーズン1

第1話 本当の自分自身に出会う為

卒業式後の誰もいない教室、一人デジカメを向けてシャッターを切る。彼は学校周辺の思い出の場所をカメラに収めていた。

彼の名は海道陸、元写真部だった。

彼は写真部の部室に足を踏み入れると自分の名前の彫られたトロフィーに触れる。そして寂し気な声で呟いた。

「もう、ここに來ることは無いんだな……」

陸は部室に涙を流しながら伝えた。

「ありがとう、さようなら」

その後学校を出ると一人の生徒が立っていた。

「気は済んだ……」

「もう大丈夫、悔いは無い」

「良かった」

陸の親友、高海千歌、陸の事を心配してずっと待っていてくれた。

二度と行くことのない中学に別れを告げて去っていく。

陸は目に哀しさを宿していた。

帰り道にとある自販機の前で飲み物を買おうと陸は片手でカメラを操作していた。

「陸君は本当にカメラ好きだよ。どうしてそんなに傾倒するの?」

陸は千歌の質問に笑顔で答えた。

「カメラつてのはタイムマシンなんだよ」

「タイムマシン?」

「人に過去を思い出させてくれる。時代、場所、時間、過去の自分、それを残すことのできる物がカメラだと思う。だから面白いんだよ、今を残すことが」

「タイムマシン……悪くないと思う。じゃあ流星苑高校でも写真部なのかな? 陸君は?」

「残念だけどそれは無理、流星苑高校は写真部無いんだ」

「じゃあどうするの?」

「仲間とやりたかった事をやる、動画配信をやりたいんだ」

「動画配信、楽しみにしてるよ」

「ありがとう」

すると陸は千歌にカメラを向ける。

「笑ってみなよ、千歌の笑顔を残しておきたいんだ」

そして千歌の笑顔にシャッターを切るとお互いは再会を約束して別の道を歩んでいった。

それから高校に通い1年が過ぎた春の頃。

浦の星女学院、千歌たちの通う高校では新入生の部活勧誘で賑わっていた。

その中に……

「みなさーん、スクールアイドル部に入部お願いしまーす」

「一緒にラブライブを目指そう、ヨーソロー！」

千歌はスクールアイドル部なる部活を作っていたが部員は全く来なかった。

挙句の果てに……

「どういうつもりですか、非公式の部活に勧誘活動とは」

生徒会室でお説教を食らっていた。

「千歌さんも曜さんも一年間言い続けましたがそんな夢みたいな部活をわたくしは認めるつもりはありません。いい加減頭を冷やしてください」

とある公園の木陰の下

「こんなの無いよおく申請却下されるし頭を冷やせて言われるし」

「まあ確かに普通じゃ考えられないよね、でも私も乗ったからにはやり遂げたいし」

紹介が遅れたが千歌と一緒にいる彼女は渡辺曜。

千歌とは幼馴染で中学時代に陸と同じクラスに在籍していた。

「こっちはうまくいかなくてどうして陸君たちはあんなに大ブレイクしてるんだろう」

「黒猫団の活躍場所は何かと優遇されてるよね」

そう言いつつ曜はスマホで黒猫団のチャンネルを見ていた。

「曜ちゃん相変わらず好きだよね、仁乃介君の事」

「野球部で有名だったからね。こうして黒猫団で活躍してるのも陸君との仲の良さだよ
ね」

説明しておこう

火流院仁乃介、黒猫団のメンバーで曜と仲が良かった野球部員。

黒猫団のチャンネルではスポーツアイテムや健康食品を扱ったレビューに登場することが多い。

「それよりこれからどうする？もう八方塞がりだけど？」

「諦めたくない!!絶対にスクールアイドルになるんだから負けたりしない!!」

「そうだよね!!私も手伝うから頑張ろう!!」

そう意気込む中で公園に飲み物を買いに来た二人が目についた。それは紛れもなく

……

「陸君!!」

「仁乃介君も!!」

カメラと買い物袋下げたかつての親友だった。

思わず二人は駆け寄った。

「陸君、久しぶり!!」

「仁乃介君おひさ〜」

「おお!千歌じゃん!!」

「曜の嬢ちゃんまで、1年ぶりだな」

その後

「なるほど、つまり千歌たちはスクールアイドルを目指して頑張っているが挫折しまくってるって事か」

「それに引き換え陸君たちは大ブレイクして今や沼津の人気者。雲泥の差だよな」

「でも曜の嬢ちゃんは簡単そうに言ってるけど俺たちは一年前まで挫折してた時期もあつたんだぞ。今ほどうまく行って無かつたんだからあんまり甘く見てほしくないな」

「ごめん、仁乃介君。そういうつもりじゃなくて……」

「謝る必要ないって、経験者だからこそ言える言葉だから」

「それなら今の千歌に一つピツタリな言葉がある」

「おっ！久しぶりだね。陸の格言」

「ある人が言った、大事な事を成し遂げたいなら光と同時に挫折、即ち闇を受け入れる事。凄まじき苦悩は人に力を与え、やがて究極となる。だから今の挫折は無駄じゃない。挫折を感じないで成し遂げられることは何も無いから」

その言葉に千歌は勇気が出た。そしてリクはこう付け加える。

「苦しい時があつたら俺に頼ってもいいんだぜ。力になるから」

「ありがとう、もう少し頑張ってみる」

「その意気だ。頑張れよ」

すると曜はある事を思いつく。

「ねえ、少し提案があるんだけど？」

「何だ急に？」

「黒猫団と私達スクールアイドルで同盟を組んで、コンピを組んだら面白そうなんだけど、どうかな？」

「千歌、どうする？」

「賛成だよ、面白くなりそう!!」

すると陸は千歌に聞いた。

「千歌は誰と組む？」

千歌は陸に笑顔で答えた。

「勿論、陸君と一緒に」

「じゃあ俺は曜の嬢ちゃんどだな」

「よろしく、仁乃介君」

ここから先、新たな物語が始まるのだった。それは誰も知らない新たな女神たちの伝説。

第2話 英雄S／彼女は風を奏でる。

あの一件から翌日

「スクールアイドルで廃校阻止、本気で言ってるのですか？」

再度申請を提出し目的をもって再び生徒会室にやってきた二人。

真剣な顔でダイヤを見つめていた。果たして……

「ちよつと失礼」

ダイヤは席を立つと電話を取り出して誰かに連絡する。

連絡を終えるとダイヤは結果を伝えた。

「部活としては認めていいわ。だけどその代わりに部員を1ヶ月の間にあなたたちを含めて6人集める事が出来れば学校側も支援すると理事長の方から話がついた。やってみなさい」

千歌その後曜と共に昼ご飯を食べつつ会話をしていた。

「1ヶ月で6人か……曜ちゃんはこの条件難しいと思う？」

「難しいの前にやってみなきゃ分からないと思う。ただ問題はセンスと技量を持った誰かを探さないと設立したとしてもうまくやっていけない。かなり慎重にやる必要がある

るね」

その後試しに何名かスカウトしてみたが結果は勿論玉砕の連続。時間も無くなって帰る時間となってしまった。

だがここで願っても無い幸運が舞い込んできた。

誰もいない教室で忘れ物を抱えて走って行く一人の少女を目撃する。

その先に一枚の紙を落としてそれを二人は拾った。それは……

「千歌ちゃん、これって……」

「自作音楽の楽譜だ」

そして千歌は目を輝かせて答えた。

「追いかけてようよ、きつとあの子は作曲の天才。スクールアイドルの素質を持つてる!!」

二人は少女を探して通学路を走り出した。

数分後

「どうしよう、どこに置いてきたんだろう。大事な物なのに……」

忘れ物に気づくとファイルを確認していた。

「待って〜!!」

すると息を荒くして走ってきた二人が少女に駆け寄る。

「あの、もしかして追いかけてきたの?」

「これ、大切な物でしょ、届けに来たんだ」

楽譜を渡すと少女はそれを受け取る。

「わざわざ届けてくれたんだ、ありがとう」

すると少女は生徒手帳を見せて自己紹介をした。

「私は桜内梨子、ピアノをやってるの」

「高海千歌だよ。よろしく」

「渡辺曜だよ！ ヨーソロー!!」

「確かスクールアイドル部の二人だよね。今日勧誘してた」

「見たの！」

「何となく通りすがった時に」

すると千歌は目を輝かせて梨子にお願いした。

「梨子ちゃん、スクールアイドル部に入って!! 音楽を作るならきつと役に立つよ!!」

大方想像通りだったために梨子が出した回答は……

「無理があるかなあ……」

翌日 ファミレスにて

ズーン

「とんだ大失敗だな、まあいきなりそんな事言われたらNOも当然だけど」

陸と千歌はファミレスで近況を聞きつつスイーツを楽しんでいた。

「うまく行くと思つたのにこの有様だよ……」

「でもそこで諦めたらいい人材なんてもういないぞ。もう少し頑張れよ」

「分かつた」

千歌はそう言いつつパフェのウエハースを口に啜えた。

その頃梨子は……

ガツバキツズガア!!

「今日こそ負けない、あなたを超える!!」

梨子の休日の過ごし方はゲームで遊ぶこと。

特に今やつてるこれは世界的人気を誇る格闘ゲーム、その名もノックアウトファイターである。

そして梨子にとってのゲームにおける最大のライバル、その名は……

パーフェクトゲーマーフィリップである。だが彼は……

「よし！相手のゲージも減ってきた。これなら……」

ズガア!!

「カウンター！しかもヒット数が尋常じゃない!!」

慢心が招いた誤算、あつという間に形勢逆転されてしまった。

「侮れないわね、流石はノックアウトファイターの世界チャンピオン」

テレビを消してゲームを終了させると楽譜を手にピアノのあるホールへと出かけて行った。

梨子は玄関前のトロフィーを見つめると寂し気に呟いた。

「私はもう、今の実力では勝てない、どうせ……」

街に出ると近くの喫茶店に立ち寄った、ただ人が多く相席する事になった。

「失礼します」

向かい側の席にはヘッドホンを付けてパソコンを打つ一人の若者がいた。

「ああ、失礼。今日は相席だった、どうぞ」

若者の礼儀正しさに安心してつつ紅茶を頼む。

すると若者がパソコンを閉じて頭のヘッドホンを外した。

パソコンをしまうと梨子に若者は会話を持ち出した。

「これからホールを向かうのか？楽譜を持つてるから……」

「はい、ピアノをやっていて……」

若者は会話を聞きつつ隣に置いてあった角砂糖を口に啜えた。

「え……あの、今凄い事やってましたけど……」

「ああ、頭を使っていると自然と糖分がほしくなるからつい癖で」

「何をなされてるんですか？」

「ランキングを支配してるんだ。ノックアウトファイターというゲームのプレイヤーだね。ただ最近まるで執着する様に僕に挑んでくるプレイヤーがいて、誰かは知らないけど、確かユーザーネームはルナとか言ってたな？」

「えっ……」

何か心当たりがあるのか梨子は一瞬固まってしまった。

「どうかしたのか？ 顔色がさつきと違うぞ」

「い、いやなんでも無いです」

「君を問い詰めるつもりは無い。ただ一つ言わせてもらおう」

「何ですか？」

「くれぐれも他者の期待や願いを裏切るような事はするな。僕はそういう人間を沢山見てきた。君とはまた会うかもしれない」

若者はリュックを背負い喫茶店を後にした。

その夜の事……

「梨子ちゃんならスクールアイドルにうってつけだと思っただけど……」

自室でそう言いつつパジャマ姿で窓を開けた。少し風を感じると向かい側の家の窓には……

「えっあ、あれって……」

思わず千歌は声を上げた。

「梨子ちゃん!!」

紛れもなく梨子だった。

千歌の声に反応した梨子は窓を開けて顔を合わせる。

「千歌ちゃん!!」

お互い声をそろえて聞いた。

「お隣同士だったんだ……」

お互い5秒の沈黙の後、千歌は梨子に尋ねる。

「考えは、変わらないかな……」

「私がスクールアイドル部でやっていけるか、不安なんだから。私が千歌ちゃんの力になれるかどうかそれで……」

「じゃあ入部してくれるの?」

「それは……」

『くれぐれも他者の期待や願いを裏切るような事はするな』

脳裏にその言葉が過ると梨子は意を決して答えた。

「私にやれるのならやりたい!!」

「一緒にやろうよ、梨子ちゃん!!」

梨子の心に触れた千歌は一つの輝きへと導くことになった。

翌日の事、音楽ホールに足を運んだ梨子。

「少し早すぎたかな……」

開かない扉の横から一人の人物がやってきた。

「スクールアイドルとやらに挑戦するようだな、ルナ」

紛れもなく喫茶店で出会ったあの若者だった。

「何であなたがスクールアイドルの事を!!」

「彼女、高海千歌と君が一緒にいる限り、繋がりとは言うのは切れないものだ」

「千歌ちゃんの事知ってるの?」

「話を聞いた限りではね。それに僕たちはノックアウトファイターでいくらでもやり

合ってるじゃないか?」

「やっぱり、貴方がパーフェクトゲーマーフィリップ!!」

「ご名答、それに君の事も少し興味深くなってきた、スクールアイドルとピアニスト、君は二つの道を極めようとしている。実にゾクゾクするねえ」

「少し変わってるのね、あなたは……」

「おっと失礼、自分は人が才能を持つことに深い意味を求めている、そう言った人に僕は

惹かれているんだ。変かもしれないけど頑張る事は無駄じゃない、頑張ってみなよ。応援してる」

梨子は彼の言いたい事を理解すると笑顔で返した。

「ありがとう」

満足気に去っていく若者、この出会いが後に大きく梨子を成長させる事は誰も知らない。

第3話 紅とロイヤルローズ

「黒猫団のコンビグループ？」

「言わば協力者だね。宣伝大使的な感じかな？」

教室でジューズを片手に2年生が話し合っていた。

「つまり活動のバックにこの黒猫団っていう動画配信者がいるって事？」

「現状は私と海道陸君。曜ちゃんと火流院仁乃介君がコンビだね」

その言葉を聞いた梨子は不安そうに呟いた。

「コンビか……私と組めるような人いるかなあ……」

「それよりも早く6人の部員見つけないと」

「そうだね、それが先だよ。梨子ちゃん、曜ちゃん次は一年生スカウトしよう」

ジューズの缶を捨てて一年生のクラスへ3人は走り出した。

部員集め開始して5分後

「嘘つき扱いされた……」ズーン

「黒猫団と仲良くなれまーすとか信じる訳ないよー」

「……」

「梨子ちゃんどうしたの？ 黙り込んで」

「実は、スカウトできるかもしれない子を見つけたんだけど……」

「それなら早く言つて!!」

声をそろえてツツコむ二人だが梨子は申し訳なきそうな顔だった。

「でもちよつと問題があつて」

「問題？」

「その子は、生徒会長の妹さんとその友達だけど……スカウトできるかな？」

その後

「本当にスカウトするつもり、ダイヤさんに何言われるか分かんないよ？」

「とにかくその逸材逃す訳にはいかないよ。陸君のように当たつて砕けるだよ!!」

そうしてターゲットのいる教室へと到着した。

二人の姿をロックオンすると千歌は声をかけた。

「ねえ、ちよつといいかな？」

「ピギイ!!」

「え？」

「いきなり何ずら」

「ご、ごめん。ちよつと話があつて」

「その子は黒澤ルビイと隣にるのが国木田花丸よ」

「えっと、だから私たちに何を……」

「お願い、スクールアイドルになって学校を救って欲しい!!」

「スクールアイドル……」

「マルたちじゃなきやダメずら?」

「どうしても二人をスカウトしたいの。ダメ?」

するとルビイは千歌のバックについていた陸の缶バッジを見て思った。

「黒猫団好きなの?」

「ああ、これ陸君からのもらい物なんだよ。」

「本物の陸と知り合いなの?」

「同じ学校の卒業生」

するとルビイと花丸は笑顔で答えた。

「家族には言い訳するから入れてほしいずら」

「私もスクールアイドルにしてください」

「ありがとう!!」

「こんな簡単に釣れた」

「案外侮れないはね。黒猫団人気」

「じゃあ改めて、2年生の高海千歌と」

「渡辺曜だよ、ヨーソロー!!」

「桜内梨子、梨子って呼んでね」

するとルビイはこの後かなり無茶な事を言い出した。

「じゃあ黒猫団のスタジオに私を連れてって」

スカウト完了後電話にて……

「ごめん陸君、流石にスタジオに連れて行くなんて出来ないよね」

「まあハツタリじゃねえからいいんじゃないかねえか。俺も支援者として見捨てねえから安心しろ。スタジオ見学、引き受けるよ」

そして週末、スタジオ見学へとやって来た。

「まさか黒猫団スタジオに遊びに行けるなんて、生きててよかったー」

「曜ちゃんが一番うれしそうだね」

「ルビイちゃんはいつも弾いてみた動画と黒猫アウトブレイクに嵌ってたずら」

「黒猫アウトブレイクカッコいいよね。少数の人たちで作られた異能バトル特撮ドラマ」

話に夢中になる中で千歌は地図を見て立ち止まった。

「あつた、ここがスタジオだ」

「大きい一軒家だね」

千歌は扉の前のインターホンを鳴らした。すると……

「ようこそ、黒猫スタジオへ」

扉を開けて陸は笑顔で出迎えた。

「本物の陸さんだ……」

「初めまして、ルビィ、花丸」

そんな中で一人の男がリビングから現れた。

「お客さんが来たようだね。とは言っても1年ぶりかな？」

エメラルドグリーン髪の毛と異国の男性の雰囲気を感じた人物だった。

「君は、風間ジュンヤ君!!」

「久しぶりだね、千歌ちゃん。それよりも上がっていきなよ。お茶をこちそうする」

そしてリビングへ案内されるとそこには3人の仲間が座っていた。

「ようこそ、黒猫スタジオへ」

「彼は？」

「ガジェットレビュー担当の如月竜太郎君さんらしく。本物らしく!!」

「竜太郎君は黒猫団の新入りだよ。中学の時よりも大人びたね!!」

「渡辺先輩も高校2年になって印象がすっかり変わったなあ」

話に夢中の中で桜内梨子はもう一人の黒猫団に声をかけられずじまい。

(フード被ったあの人、ずっとスマホ触ってて声かけないな)

その男は何故顔を隠しているのかいささか疑問だった。梨子は声をかけてみる。

「あの、良かったら私とお話どうですか？」

すると男はスマホの指を止めてフードを外した。だがその男は……

「すまない、集中しすぎて気付かなかった。桜内梨子だったかな？」

「パーフェクトゲーマーフィリップ!!」

「じゃあ改めて。僕の名前は神室集。ゲーム実況担当で黒猫団の編集者だ」

「じゃあ私や皆の事も……」

「陸から聞いている。だから君の事も知っていたんだ」

物事の辻褄の良さの理由をようやく知る事になった。

「お話は楽しめてるね。アップルパイと紅茶が出来たから一緒に」

「ジュンヤさんありがとうございます!!」

「因みに千歌ちゃんと曜ちゃんはジュンヤ君と同じ学校の出身なの？」

「同じクラスだったし、テスト前には色々助けてくれたんだ」

「でも、あんまり日本人のイメージを感じないのは何でだろう？」

「僕の家系はイギリスの貴族で音楽家の家系なんだ。」

「ファンガリオンって言うイギリスの古参貴族の末裔だからな。」

「ちよ、ファンガリオンってあのオーケストラのファンガリオン!!」

「梨子ちゃん知ってるの?」

「一度公演を見たことあつて」

「それは嬉しいね。一族の一人として光栄に思うよ」

するとジュンヤをチラチラ見ながら紅茶を啜るルビイにジュンヤは声をかけた。

「ルビイちゃんも硬くならずになにか話してみたらどうかかな?」

「えつと……この紅茶、凄く美味しいですね。」

「ああ、その紅茶はファンガリオン伝統の紅茶だからね。気に入ってくれて嬉しいよ」

そしてルビイはジュンヤに心に秘めていたお願いがあつた。

「ジュンヤさんってロイヤルローズって言うヴァイオリンを持ってましたよね?」

「ロイヤルローズか。あんまり扱う事は出来ないけど見てみたい?」

「はい」

ジュンヤはリビングの絵画の下からヴァイオリンケースを取り出す。

「これが、ロイヤルローズ」

「そう、一族の証」

「このヴァイオリンは質の関係上無暗に扱えないからね。ごめんけど音色までは……」

「いいえ、見せてくれただけで十分です」

そうして話が続く中で陸は重要な事に気づく。

「なんか、初対面なのに仲が良くなってきたな。これならコンビ成立も早そうだな」

「コンビ?」

「千歌たちのバックには俺達黒猫団がいる。コンビって言うのはそうして一名に付く支援者の事だよ」

「梨子とルビィ、花丸は誰と組むんだ」

すると3人は少し考えるところを答えた。

「集君は私でいい?」

「勿論、その代わりに君の成長を見させてもらうよ。」

「じゃあ、マルは竜太郎さんと」

「よろしくな、花丸。」

「ジュンヤさんはルビィと一緒に良いですか?」

「当然、僕で良ければ。」

こうしてコンビグループ成立と同時に夕方まで話に明け暮れた。そして帰宅後の黒澤家では……

「お姉ちゃん、ちよつと話があるんだけど良いかなあ?」

「あら、何か相談でも？」

ルビィは正座をして真剣な眼差しをダイヤに向ける。

「ルビィね、スクールアイドルを始めたの」

ルビィは少し怯えていたが意を決して伝えた。

「お姉ちゃんがやろうとした事は知ってる。でもやってみたい!!」

ダイヤは一瞬口を歪めたがため息をついて答えた。

「好きなようにやってみなさい。応援してる」

ルビィは嬉しそうな顔になりダイヤに抱き着いた。

「ありがとう、お姉ちゃん」

ダイヤはまんざらでもなさそうな顔でルビィを受け止めたのだった。

第4話 墮天使と狼の邂逅

「たつたの1週間で5人もそろえたのは見事ですわ」

生徒会室に呼ばれた5人は息を呑む。

いきなり呼び出しと言うパターンに薄々嫌な予感が脳裏に過っていた。

「マルたちは一体どんな理由で呼ばれたずらく」ガクガクブルブル

「花丸さん、特に悪い話ではないので冷静に」

とりあえず説教や問題と言う訳では無さそうだったので一安心。

そしてダイヤは本題を切り出す。少し頭を抱えつつ間を置いて……

「5人には少しある人の問題を解決してほしいんです」

「その人の名前は？」

「津島善子と言う一年生。ここの所不登校で沼津周辺を遊び歩いているとかで……」

「確かにそれは問題だね。それで私たちはその子を学校に来るように促せばいいの？」

「それが何故ルビイ達なんでしょうか？」

「善子さんは元々音楽が好きでアニソンやダンスの技量が良いんです。スクールアイドルにはうってつけの人材と考えていいと思います」

「ああ!!」

突如として何かに気づいたように花丸が声を出す。

「どうしたの!!急に!!」

「マルの幼馴染だったずら」

「ええっそれ今思い出したの!!」

「この学校にいるとは知らなかったずら」

「知らないのも当たり前ですわ。何せ入学式以降学校に来てないんですから」

「じゃあその善子ちゃんをスクールアイドルにすればいいんだね」

「厳密にはスクールアイドルを理由とした不登校の脱却ですが」

「でも今回ダイヤさんやけに積極的だけどうして?」

「理由の詮索はともかくすぐに行動に移してください!!」

何かをはぐらかす様に5人を生徒会室に置いて出て行った。

その様子を見た梨子は何かを察しておりその後難しい顔をしていた。

土曜曰

「……」

「梨子ちゃん何を考えてるの?」

「ご、ごめん、大したことじゃないから気にしないで。」

「とりあえず今は頼まれたことに集中しよう。ダイヤさんが渡してくれた写真と出沒地点の地図があればそう時間はかからないよ」

「念のために黒猫団と情報を共有しておけば対処も早くなるけど伝える？」

「今のところは必要ないよ。出来る限り私たちがやらないと」

「とりあえずまずはサーティーセブンアイスクリームを尋ねてみようよ」

「ここから先は分かれて探した方が良くかもしれないね」

「それもそうだね。でもルビイちゃんは一人に出来ないね」

「マルと一緒にいるから任せるすら」

「花丸ちゃん、任せたよ」

5人はサーティーセブンアイスクリームの前で集合することを決めて分散した。

オカルト屋にコスプレ屋、ロックバンド専門店。待ち伏せや店内を見回ること1時間。

ロックバンド専門店にいたルビイと花丸は黒服の少女を見つける。

間違いなく津島善子本人だった。

「いた!!」

「突入すら!!」

攻撃を仕掛ける二人に善子は感づいて逃げ出した。

「しまった、邪教からの追手だ!!」

一二階の楽器コーナーから一階に逃亡を図るもどういふ訳か階段で転んだ。

「ああ、ああああ……神よ……」

余りにもあつけない逃亡劇に引きつつ二人は善子を捕まえた。

「邪教の魔術師の犬よ、私を離せ!!」

「何言ってるの、善子ちゃん」

「善子ちゃんはこういうタイプすら」

「まさか、その喋り方はずら丸!!よりよつて一番逃げたい相手に……ぐぬぬ」

「とりあえず話があるから私たちの所に」

「話なんか聞きたくない。それに私は善子じゃなくてヨハネ!!墮天使ヨハネよ!!」

「じゃあヨハネと呼んであげるから私たちの話に乗つてよ」

「嫌だ嫌だ嫌だく!!」

「どうする?」

「このままでと平行線だし無理矢理にでも連れていくすら」

津島を強引に引つ張り、連れて行こうとする。その善子の目には涙が浮かんでいた。

「突然悪い、そいつは今連れて行かない方が良いと思うぞ。お前ら」

その言葉と共に階段から一人の癖のある男子が下りてきた。

「えっと、私たちはただ善子ちゃんを連れてくるように頼まれただけで……」

男子は手をポケットに入れてため息をつきつつ正論をかました

「あのなあ、自分の都合云々の前にそいつの言葉に耳を傾けるのが礼儀だろ。それよりどうしてそいつを連れて行こうとするんだ？」

「善子ちゃんに学校へ来てもらうためにどうしてもマルたちの部活の話聞いてもらわずら」

「このまま不登校を放っておけないから」

「私はあんな邪教の集まりに参加するつもりは無い。第一私は津島善子じゃなくて墮天使使ヨハネだから!!最も私のこの姿を皆は唾うでしようけど!!」

「ルビイ達はそんな事しないよ。ちゃんと受け入れてあげるから!!」

「だから学校に行くぞら!!そしてスクールアイドルで日本一になるぞら!!」

「ヨハネとか言ったな。本人はこう言ってるが満足か？」

津島は少し考えると改まって二人に聞いた。

「私の笑ったりしないよね？」

二人は頭を縦に振り津島に対してこう伝えた。

「友達を笑ったりしないよ。寧ろそういう善子ちゃんがルビイ達には必要だから」

「マルも善子ちゃんとアイドルをやりたいぞら。マルたちは善子ちゃんの味方ぞら」

津島はその言葉を信じて二人の手を握った。

「ありがとう。そしてよろしく!!」

「ようやくつながったか。全くリーダーも熱い物を見せてくれるな」

「え?」

突然男子が言った言葉に反応する。

「どういう事ずら?」

「リーダー、リクと千歌ってやつから頼まれてたのさ。ルビィと花丸二人だけにしてたら色々危ないと思って派遣されたんだ」

「じゃあ、黒猫団!!でもあなたみたいな人っていないかったような……」

男子はメガネを外し、被っていたキャップを取るとその姿を明かした。

「これでもうわかるだろ?」

「あなたは巧さん!!」

「黒猫団歌ってみた動画担当の犬革巧だ。また今度、黒猫団スタジオで」
手を振り、去っていく巧の姿に津島は少し嬉しそうだった。

そして休みが終わった後の生徒会室では……

「善子さんの不登校の件は解決出来て何よりですわ」

「これで6人、部活設立の目標達成だね」

「それじゃあこの申請は承認させてもらいますわ」

印鑑の押された部活申請証に千歌達はニヤニヤが止まらなかつた。

放課後

「これが私たちの、念願の部室」

「ここから新しいスタートが始まるんだ。もうワクワクしてるよ」

「その前に部屋を整えないと」

そして物語は、ダイヤたちをも巻き込んでいく。

第5話 本格始動と見えざる影

「まさか本当に6人集めるとは大したものデース」

「私はこの部活の件は断固反対だったのですがどうしても条件付きで了解したのですか？」

ダイヤの目の前にいる彼女、小原鞠莉は一瞬口籠り、それをはぐらかす様に返す。

「それはシックレット、特に私情でOKしたわけじゃないデース」

「あなたのそのジョークの裏の本音を洗いざらい話してほしいですが……」

「細かい事は気にしないで。後は私の仕事なので」

「分かりました。それでは失礼いたしました」

部屋を後にするダイヤを見送りつつ、鞠莉は席を立つと校庭で部活に励む生徒を見つめたため息をついた。

「私はいつまでこんな罪の意識を抱えたままなんだろう。決別すると分かってた物を認めるなんて……何なんだろう？この分からない感情は……」

黒澤家

「ああ……」

ダイヤが帰宅して鞆を置き、遊びに行つて不在のルビイの部屋を掃除しようと考えた。

だが黒猫団アイテムに支配された部屋は見方によつてはオタク部屋そのものだった。ポスターにタペストリーにサイズの合わないオフイシャルシャツ、ぬいぐるみや写真集などが部屋を染め上げ、ダイヤは月のお小遣いがこのアイテムたちにつき込まれていることを実感した。

「まあ、これもルビイの楽しみと思えば……耐えられる!!」

大事な妹の趣味を受け入れてとりあえず掃除機をかけ始めた。

大切な妹のアイテムも傷つけないように埃を払い掃除を終えたダイヤの笑顔は爽やかだった。

「これでルビイも喜びますわ!!」

部屋を後にする予定だったがダイヤは本棚にある写真集を見ようと手をかけた。

「あれ、この本だけですごくせり出してる」

不自然に本がせり出した部分は奥に小箱が置かれていた。

ダイヤは本を全部取り出して小箱を手にとった。

「大きさと形状からして宝石箱のようですが……」

恐る恐る箱を開けると小さなピンとルビイの大好きな黒猫団の風間ジュンヤの写真

が入っていた。

「このビンの中身、何かの葉っぱ……」

ダイヤは嫌な予感を感じていた、ルビイが悪い輩から危ない葉を買った事を想像してしまい、ビンを開ける手は震えていた。

だがその正体は簡単に分かった。

開けたビンの中から甘い香りを感じ、ダイヤはこの香りから正体を察した。

「これは、アールグレイ……紅茶の葉……」

紅茶の葉に気づき、安心するダイヤはそつとビンの蓋を閉めた。

そして一緒に入っていた写真を見たダイヤは写真を裏返す。

「こ、これは……」

写真の裏が地図になっている。そして住所と黒猫団スタジオの名前が記されていた。

「まさか……」

そこから翌日の事、ダイヤは生徒会の仕事を理由に写真の場所を訪れる事にした。

「ルビイ、お留守番よろしくお願いね」

「行ってらっしゃい、お姉ちゃん」

そして一人になったルビイは部屋に向かい、小箱からあのアールグレイの紅茶を取り出してリビングへと向かった。

「ジュンヤさんから貰った大切な紅茶、飲める時が来た!!」

ティーカップセットを用意してルビィは一人で紅茶を嗜もうとしていた。

そして黒猫団スタジオに向かうダイヤは街に出ると地図の通りの道を進んでいた。

「こんな路地裏を通るなんて、一体どういうルートなのでしょう?」

路地裏を抜けると住宅街に着く。

これにはダイヤも驚きだった。

「路地裏の先にこんな住宅街が……」

地図を見直して目的の場所を確認する。

「あそこですか……」

たどり着いた一件の住宅、場所も地図と一致してダイヤは黒猫団スタジオがここであると確信した。

ダイヤは恐る恐るインターホンを鳴らす。

ピンポーン!

「ん?」

中にいたジュンヤはモニターを見ると首をかしげた。

「大和撫子?」

ガチャ

「やあ、僕の家は何用かな？」

「ジュンヤさん……」

「追っかけのファンと言う訳でもなさそうだけど……」

「あの、この家に私の妹が来ませんでしたか？」

「妹？」

「はい、赤髪の……」

「赤髪……彼女、ルビイちゃんの事かい？」

「やっぱり」

「確かにここを訪れてるよ。スクールアイドルの皆と」

「じゃあ、少し話を聞かせてほしいんですが……」

ジュンヤはそれを快く受け入れてダイヤを招き入れた。

「話をするならぜひ上がって行つて。いい紅茶をこちそうする」

スタジオ兼リビングに入ったダイヤの前で紅茶の葉を火で燻す。

その香りはルビイの持っていたアールグレイと同じだった。

「やっぱり、ルビイの部屋にあったアールグレイ」

「ああ、ルビイちゃんこの紅茶をすごく気に入つててね、本来は僕の一族しか手に出来ない特別な物なんだ。ルビイちゃんに確かティーカップ4杯分渡したかな」

「ジュンヤさんってルビィから聞いた話によればイギリス人のハーフだと」

「音楽家の家系だね。ファンガリオンと言う貴族の生まれなんだ」

「ファンガリオン交響楽団のあれですか!!」

「勿論、僕は後のファンガリオン交響楽団の後継者でもあるんだ」

「その人がまさかスマチューパーやってるんですね。驚きです」

「紅茶が出来た、ここからゆっくり僕たちの事について話そう」

ジュンヤは黒猫団とスクールアイドルの事についてダイヤに全部話した。

千歌とは同じ中学の卒業生である事を知ったダイヤは黒猫団と千歌たちの関りについて少し理解を深めた。

自分が拒否したスクールアイドルへの思いにも触れることが出来、千歌やルビィの心を知ることが出来た。

「事情は分かりました。つまり黒猫団はスクールアイドルの宣伝の立場であるという訳ですね。」

「それじゃあ、ダイヤ先輩」

「せ、先輩って……」

「いや、僕より年上なら先輩じゃないかな?」

「それもそうですけど……まあいいですよ、呼んでいただいて」

「少し質問をさせてくれるかな？」

「はい」

「ダイヤ先輩は今後スクールアイドルとして活躍したりするのかな？ ルビィちゃんがいるなら一緒にやってそうなんだけど？」

余りにも唐突な入部の質問に一瞬、身体に電流が走った。

「ごめん、何か気に障る様な事言ったかな？」

「いや、ちよつと悪い物を思い出して……」

「まあ、ダイヤ先輩の事も考えて問い詰めるつもりは無いから」

「はい、そつとしておいてくれるとありがたいです」

そして帰る時間になり、ダイヤはジュンヤに頭を下げた。

「お話、ありがとうございます」

「僕も楽しかった。来てくれてありがとう」

「また、訪れても良いですか？」

「勿論、ルビィちゃんと二人で遊びに来てね」

「それでは、失礼しました」

ジュンヤはダイヤを見送った後、リビングで食器を洗いながら今日の夕飯の献立を考え始めた。ジュンヤを顔はいつも以上に嬉しさに満ちていた。

その頃黒澤家では

「ピギイ!! ジュンヤさんの家に行ってきたの!!」

「ごめんなさい、実は部屋を掃除したときに紅茶と地図付きの写真を見つけてしまって」

「じゃあ、スクールアイドルの事も」

「はい、全部聞きました」

バレると考えてなかったルビイは帰りの遅さの元凶を突き止められ、この世の終わりの様な顔をするのだった。

だが意外にもダイヤの対応は優しかった。

「ルビイ、いい友達と出会いましたね。」

「え?」

「ジュンヤさんの家が楽しかったのなら、今度は私も仲間に入れてください」

「もっと、怒るかと思った……」

命拾いしたルビイは思い出していた。

ここ2週間ジュンヤさんの家でゲームやったり、トークしたり、ジュンヤさんに晩御飯ごちそうになったり楽しいことだらけだった。

「今度はお姉ちゃんと一緒に……」

ルビイは楽しそうだった。

第6話 マーメイドの語る夜

スクールアイドル部が設立され、部室も完成した頃。

千歌「やっと終わったね」

ルビィ「結局、午後二時まで動いてた……」

善子「よりにもよってゴールデンウィークの前で学校半日なのにずっと黒霊布ぞうきんで床を拭く羽目になるなんて……」

曜「とりあえずお疲れ様。早く準備して帰らないと」

善子「こういう時に限って梨子は今頃集君とゲームライブだし」

ルビィ「花丸ちゃんやんは竜太郎君とネットカフェでオンラインゲーム……」

曜「皆、落ち込むのは分かるけどもう終わったんだし帰ろうよ」

帰路についたメンバーはその後、布団の上でグダグダしたのは言うまでもない。

そしてゴールデンウィークに入った翌日の事、スマホにある人物から電話が入った。

千歌「これって、果南ちゃん!!」

松浦果南、千歌の3人目の幼馴染で淡島でダイビングショップを経営している。尚、黒猫団のチャンネルのユーザーでもある。

千歌「やつほー、果南ちゃん久しぶりー!!」

果南「久しぶりー!! そっちは元気そうだね。スクールアイドル始めたそうじゃない。頑張ってる?」

千歌「何とか認めてもらえたよ。後、黒猫団に助けてもらいながら」

果南「じゃあ、陸君ともまだ一緒にいるんだね」

千歌「一年生の頃はまだ忙しくて会えてなかったけど2年生になってようやくつて感じ」

果南「じゃあ、陸君も一緒に誘っても良いかな〜♡」

千歌「え? どういう事?」

果南「実は今、家族が旅行に行つて出払つてて、私一人なのよね。それにゴールドンウィーク孤独に過ごしたくないから泊りに来てほしいなあって」

千歌「果南ちゃんの家にお泊り!! 行く行く!! 絶対行く!!」

果南「じゃあ、ついでに陸君たちも誘つてくれる?」

千歌「勿論、皆で行くよ!!」

と言う訳で

陸「果南の姉さん家でお泊りか。そう言えば中学卒業以来、顔出してなかったな。」

仁乃介「果南の姉貴にはうちの店でお世話になってるから俺は久しいとは思わないけ

ど」

曜ちゃん「折角だし皆で泊りに行こうよ。楽しそうだし」

仁乃介「じゃあ、昼飯の握りと煮つけとかこつちで用意しておくからそう伝えておいてくれ」

曜「お寿司はちよつとなあ、生魚だし（汗）」

翌日、4人は淡島へと向かった。

陸「この風景懐かしいなあ」

曜「何も変わって無いよね、ザ・思い出の場所って感じ」

千歌「早く、果南ちゃん所に行こうよ。」

陸「千歌、危ないぞ。全く……そういう所全然変わって無いよなあ、あいつ」

一呼吸して陸は千歌を追いかけた。

仁乃介「微笑ましいな、あの二人は……」

曜「あの二人はてこずるからねえ、昔から」

そして果南の家に着きインターホンを押した。

ピンポン!!

果南「皆々待ってたよ!!」

出会って早々に千歌にハグをかます果南。陸は見ないふりをして表のダイビング

グズに目を逸らす。

千歌「果南ちゃん苦しいよ〜」

仁乃介「果南の姉貴、それぐらいにしといた方が良くもしいぞ。陸が耐えるの必死だから」

果南「じゃあ、陸君もハグ〜♡」

陸「ば、バカ、いきなり抱き着くんじゃねえよ!!」

果南「なんで〜昔からずっとハグしてたじゃない。何で嫌がるの〜」

陸「そろそろライン超えてるだろ!!やっつていい事の範疇を!!」

果南「とりあえず、今日は来てくれてありがとう。一晩よろしくね!!」

陸（何か問題起きてもおかしくないな。男としての尊厳守り抜かねえと）

仁乃介「それよりも飯だ。火流院の握り寿司と金目鯛の煮つけ持ってきたから楽しもうじゃないか」

部屋に案内されたリクたちは大広間で昼食の準備をしていた。果南が冷たいうどんを作り、リクは手慣れた手つきでだし巻き卵を作っていく。

陸（千歌のエプロン、案外好みだな）

陸は少しそう思っていた。

陸「……」モグモグ

無言且つ何か耐えるような表情で寿司を食べる陸に仁乃介はフォローを入れる。

仁乃介「そこまで警戒する事無いだろ。もっと自然体に……」

陸「いられるかよ、そもそも何でお前ら水着なんだよ!!」

果南「後で、海に潜るからでしょ」

陸「まだ五月になったばっかだろ。温かいとはいえ海はまだ早いだろうが」

曜「まあ、細かい事は気にせず陸君も一緒に泳ごうよ」

陸「水着も持つてきてねえし俺は写真を撮りながら時間潰すよ」

果南「じゃあ、私たちの専属カメラマンになつてもらおうかな」

陸「まあ、それならいくらでも撮つてやるよ。SDカードも買い足したしな」

と言う訳で海へ

曜「ヤッホー……!!」ザバーン!!

陸「見事なジャンプだな。その分いい写真が撮れた」

果南「陸君これどうかな？」

果南は胸が見える限界まで水着をずらしている。

陸「ぶ……ぶ……ぶ……!!!!」

果南「ああ、警戒する理由こう言う事なんだ、なんか可愛い」

千歌「仁乃介君がいた方が良かった？」

陸「そうだなあ、あいつ夕食のカレー作りで居残りかってでたし、ちよつと不安になつてるのは間違いないな」

千歌「それよりも私は？もつと写真撮つてほしいんだけど？」

陸ドキッ「ああ、もちろんだよ（あれ？何動揺してんだ。俺、一瞬千歌が可愛く見えた）」

曜「??？」

果南（へえ、陸君さつきときめいたね。凄く可愛い）

曜「果南ちゃん何か嬉しそうだけど……」

果南「乙女の第六感つてやつだよ。微笑ましいよね」

曜は果南の発言の意味を理解しようとしたが触れてはいけない何かを感じ海を泳ぎまくつた。煩惱をかなぐり捨てて。

海を満喫して帰る頃にはカレーのいい匂いが大広間に漂っていた。

果南「いい匂い、仁乃介君流石だね」

仁乃介「ジュンヤに頼んで使うスパイス一式頼んだからな。因みにココナッツミルクを混ぜてマイルドに仕上げてみた。まあ、ジュンヤからついでに貰ってきた奴だけど」

曜「ジュンヤ君は料理にこだわるよね。流石と言うか」

果南「それより、早く食べようよ」

陸「とりあえず、着替えてからな。いつまでも水着でいられたら困るし」

千歌たちは着替えを持ってお風呂に向かい汗を流す。その間、陸は皿にカレーを盛り付けて机に並べていた。

そしてパジャマ姿三人と夕食を食べていた時、陸は果南に尋ねる。

陸「姉さん、俺達どこで寝ればいい？」

果南「二階の方にスペースが空いているからそこで。私たちはこの大広間で寝るわ。後で机運ぶの手伝ってね♪」

そして夜十時になり、俺達は2回の和室で眠る。

目を瞑っていたが陸は眠れずにいた。

何か引っかかる物があり、陸は布団を抜け出してカメラと上着を持ってダイビングシヨップを出た。

陸「俺はにとつて、千歌は……」

そう思った陸は上着からSDカードホルダーを取り出して中学時代の日付のカードをカメラのスロットに差し込む。

フォルダーを開き、千歌の写真に目を通した。

矛盾に満ちた瞳に少し乾いた表情、だがそれも一発で目が覚める。

陸「のわあ!!」

果南「いい顔してるね、ウブな年ごろの」

果南は両手に缶サイダーを持っており一本を陸に渡す。

陸「急になんだよ、人の悩んでるところ割り込んできて」

果南「それってさ、恋でしょ」

陸「い、いやいや、それは無いだろ。俺が千歌にそんな……」

果南「陸って恋愛とかに物凄く弱いよね。好きっていう感情とかに対して初心丸わかりだよ」

陸「からかいに来たのなら早く寝てくださいよ」

果南「ごめんごめん、もうからかわないよ」

二人の話す後ろでは……

曜「な、なんか聞いちやいけない事聞いちやったような……」

顔を赤くして悶える曜がいた。

陸「それより、姉さんに聞きたい事があったんだ」

果南「何？」

陸「スクールアイドルとして、千歌を支えてほしいんだけど……ダメかな？」

すると果南は一瞬口籠りこう伝えた。

果南「悪くないとは思うけど、私には出来ない」

陸「その理由は？」

果南「この事は千歌ちゃんには秘密にしてほしい。話すのは、陸君だけだよ」

陸「約束を守るよ」

果南「実は……」

陸「え？それって……」

陸は果南から聞かされた話にただただショックを受けるだけだった。

陸の中で一つの悲劇的な……

第7話 キングダム・ワルツの夜

公園の大樹の上、ゴールデンウィークの中で陸は静かに昼寝をしていた。

ただ陸は心に引つ掛かる果南の話に納得できずにいた。

それはあの日の夜の事……

果南「私にとってスクールアイドルは大切な物を失ったきつかけなの？」

陸「え？それって……」

果南「昔ね、私は友達の小原鞠莉と黒澤ダイヤと3人で学校の為にスクールアイドルを立ち上げた。少しづつ練習重ねて自分で歌もダンスも作って、勿論楽しいとは思ってた。でも……」

陸の身体を悪い感覚が支配する。果南は陸に対して最悪の出来事を伝えた。

果南「私ね、鞠莉とステージのリハーサルでぶつかって、鞠莉の足にケガを負わせたの。その後病院に運ばれて、ただ私は泣く事しか出来なかった。ステージも中止になって私は逃げるように家で家業のダイビングショップをやってるの。あれ以来ダイヤとも鞠莉とも連絡すら取ってないから、もう、私は皆の下へ帰れないなって」

陸は果南のバックボーンに触れた事で自分自身の愚かさを知った。

自分や千歌の行っている事が果南のかつての引き裂かれた出来事の傀儡だと。

陸「本当に、それでいいののか？」

果南「恨まれてるなら、私はそれでいい。私の失敗だから」

陸「最悪だ……これでいいって知ってるのに、なんで俺、助けようとしているんだ？」

陸はポケットからミントタブレットを取り出し、口に投げ込んだ。

陸「俺にどうしろって言うんだよ、あく落ち着かねえく!!」

ジュンヤ「お困りの様だね、なにかあったかい？」

陸「こっちの事情だ、ジュンヤであつても話す事は出来ない」

するとジュンヤはその感覚に違和感を覚えていた。唇に手を当てて小言を言い始める。

ジュンヤ「あの感じから考えるに曜ちゃんから聞いた話と一致している訳じゃ無さそうだ。他に何か隠し事が……」

事の真相を知るため、ジュンヤは提案をした。

ジュンヤ「陸、果南ちゃんから聞いた話、全部僕に聞かせてくれないか？」

陸「いや、それは出来……」

ジュンヤ「何か重大な物を感じているんだ。誰にも話さない、僕だけに教えてくれ!!」

陸は仕方なくジュンヤにのみ果南の過去を打ち明けた。

ジュンヤ「なるほど、つまり果南ちゃんも過去に友達を傷つけて学校に来れなくなつたのか。穏やかな話ではないね」

陸「その原因となつたのがスクールアイドル。こんな話、千歌や皆には話せそうにないな。いわば会話のブラックボックス」

陸は割りばしで水飴を練りつつ今の自分の心境を伝えた。

陸「俺、どうすればいいのかわかつて、本当は関わるべきじゃないと思うから無視しようとしたけど、明らかに俺、関わろうとしてる。何でだろうな」

陸は白くなった水飴を口に啜える。ジュンヤ真剣に陸に尋ねた。

ジュンヤ「陸はさ、昔から人を助けようとして逃げない事は自分もわかつてる。陸はそうやって無茶してばっかだったのを考えると、……」

本当は助けたいんじゃないの、逃げようなんて考えてない、そうだよな？」

ジュンヤに言われて初めて気づく、陸は困ってる人をほっとけない。

それを思い出した陸は頭に当てる。

陸「まさか、ジュンヤに気づかされるなんてな、俺は……」

姉さんを助けようと思う。そして、果南もその友達も、スクールアイドルになつてもらう。絶対に、このままでいいなんて言わせない」

目に力の入った事を確認したジュンヤは陸にこう伝える。

ジュンヤ「僕も力になる、スクールアイドルの皆や黒猫団に協力してもらおう」

陸「頼んだぞ、ジュンヤ」

陸達はスタジオ二階の会議室に黒猫団とスクールアイドル部を集めて作戦を立て始めた。

そしてこれがある一つのシナリオが完成し、ジュンヤたちの案で完成したが……

ジュンヤ「一つ考えたのが無理に僕たちが関わるべきじゃない、果南ちゃんにスクールアイドルの楽しさと自分から未来を変える希望を持たせるべきだ」

仁乃介「つまり、俺達は果南を促すと同時に後は果南の姉貴に委ねる訳か」

ジュンヤ「そこで、この作戦の基礎となるある人物を呼び出した」

ジュンヤは指を鳴らすと扉から一人の高校生がやってきた。

曜「えええええええ!!」

ジュンヤ「皆はもうご存じだと思う。彼は黒猫団の三皇帝の一人……」

???「野上アラタです、動画の方ではダンスを中心に活躍しています」

ジュンヤ「今回は彼に協力を仰いだ、彼は夜の間はディスクに通い詰めてるからね」

梨子「ディスクかあ、行った事無いなあ」

ジュンヤ「彼には果南ちゃんとディスクを楽しみつつ、交渉をしてもらおう。頼んだよ、

アラタ君」

アラタ「お役に立てれば、嬉しいです」

数日後、夜七時

果南「お待ちせ、陸君」

陸「すまないな、こんな時間に」

果南「だって、あの黒猫団のアラタ君に会えるって聞いたから」

陸「もう少しで来ると思うよ、今頃予約が終わったと思うから」

すると書店二階からアラタがエレベーターで降りてきた。

アラタ「やあ、初めましてだね。果南さん」

果南「動画、見させてもらってます。今夜はよろしくお願いします」

陸「じゃあ、行こうか。今夜はお楽しみだぜ」

3人は書店2階のディスコへと向かって行った。

多くの大人や学生たちがダンスに興じてる光景の中でアラタは一つ提案をした。

アラタ「果南さん、左のステージ30分くらい貸し切りできるから僕と踊ってみない

？」

果南「え……」

果南は少し思考が固まった。人混みで踊るのではなく、一つのステージの上。自分の

失敗が通り、果南は断ろうとした。だが……

陸「一つやってみなよ、俺は見たいと思う」

アラタと果南はステージに上がる。

多くのギャラリーが見守る中で、果南は逃げたい衝動に駆られていた。

そして、アラタは果南にある事を伝える。

アラタ「ここで逃げたら、君はギャラリーの中にいる大切な人の想いをないがしろにすることになる。自分の思うがまま、踊ればいい」

果南はとりあえず、自分のダンスパフォーマンスを披露する事に専念した。

そしてステージに上がり、音楽がスタートする。

果南は音楽に乗り、自分自身のかつて抱いていた感覚を取り戻していく。

アラタもそれに応えるように果南のダンスにカバーアレンジのビートボックスとダンスを乗せていく。

そしてパフォーマンスが終わると、大勢のギャラリーの歓声が沸き上がった。

その中で陸は果南に駆け寄り、果南にある事を聞く。

陸「頑張ったな、でも何故、それだけのダンスが出来るのに逃げてたんだ？」

無言の果南に陸はある事実を突きつけた。

陸「今日のダンスを通じて、姉さんは十分償ったよ」

果南「え、どういう事……」

陸「振り返れば、もう受け入れられてるよ」

そして果南の後ろには……

かつての友達が笑顔で立っていた。

必死で目を逸らそうとする果南にダイヤと鞠莉は声をかける。

鞠莉「もう、逃げなくていいのよ。果南の気持ち、もう分かってるから」

ダイヤ「もう一人で抱え込まないでください。苦しむ必要なんてありません」

果南は二人の言葉が真実か尋ねる。

果南「本当に、許してくれるの？」

鞠莉「本当だよ、苦しかったよね？だから、果南も泣いて……いいんだよ……」

3人は泣きながら身を寄せ合い、また、3人の友達になれた。

その様子を見た、陸とアラタの横には……

陸「協力感謝するよ。ルビィ、梨子」

ルビィ「結構、危ない交渉だったよ」

顔が真っ青のルビィはオレンジジュースを口にする。

梨子「こつちも引つ張り出す為に凄く苦労したよ、しかも今回の出来事で黒猫団との

関係も明るみになった」

そして物語は、更なる高みを目指すことになる。

第8話 何事も対人関係は形から入る物

某ファミレスにて

陸「鍋、やらないか？」

五人「え……」

突然の発言に少し思考が停止してしまった。

何故突然鍋なのか、5人はその理由を聞いた。

梨子「何故唐突に鍋やるの？」

陸「スクールアイドルが認められ、新メンバーに3年生が加わって万々歳の中、俺達の関係は余り根付いてないと思うんだ。黒猫団が毎回プロデュースしてネット活動で徐々に認められている今だからこそ、何か物足りない関係をより強くするために鍋を囲もうと考えた訳だ」

その発言に対して面々は説得力を感じる。

集「実に合理的だ、この未だに纏まりのないコンビの関係を強くするいい機会になりそうだ。僕は悪くないと思う」

仁乃介「鍋パーティーならジュンヤの家に皆を呼ぼうか。話を聞いたジュンヤなら良

い食材用意してくれるよ、曜の嬢ちゃんはどうかだ？」

曜「折角皆で集まるならちようどいいと思う、ゴールデンウィークの終盤だし」

千歌「鍋パーティーなら私、陸君と一緒に食べたいな！」

陸「あ、ああ……俺もそう思ってた、ていうかそもそもこの鍋企画もコンビグループ前提のイベントだし」

千歌「じゃあ、期待してるよ」

陸「ど、どんとこい!!だな……ハハ……」

曜（明らかにデレてる、隠そうとしてるけどボロが出てるよ、陸君……）

梨子（陸君って純粹無垢すぎて、見えちゃいけない物まで見えてるような気がする）

ファミレス解散後

陸「と言う訳で鍋パーティーやるからガスコンロと食材の用意頼むわ」

ジュンヤ「任せてよ、良い食材を用意しておく。後3年生のお迎えに三皇帝を呼んでおくよ、鞠莉先輩や果南先輩に紹介したいから」

陸「それじゃあ、明日は俺も手伝いに行くから、早朝からよろしく」

伝言を伝えた陸は帰路へとついた。

翌日

陸「キャベツ6玉分にネギ7本と人参5本シイタケ18とこんなもんか、後はしらた

きや豆腐にチーズと締めのお米とうどん、そしてメインとなる肉類は鶏のつみれとしゃぶしゃぶ用高級牛肉。ベースはカツオ出汁と二つ目にトマトスープ三つ目は豆乳、一応安かったから買ってきた焼きそばとタコ焼き粉、食材的にはこんなもんか」

食材の下準備を終えた陸はジュンヤにエプロンを返す。

ジュンヤ「お疲れ様、わざわざ手伝ってくれるなんて」

陸「これも案外楽しいからな、後はもう少しで千歌たちが来るだろうし仕事を早く終わらせただけさ」

冷蔵庫からレモンスカッシュの缶を取り出し、プルタブを開けて飲み干した。

そして3年生組は

鞠莉「合流場所はこの場所ですか、路地裏の前とは……」

果南「それよりも早く会いたいなあ、黒猫団の三皇帝、ドキドキする〜」

ダイヤ「私もルビィからよく動画を見せてもらっていたのでよく存じてます」

そして町中の若者の視線を奪う、洗練されたファッションの三人が現れた。

それこそがあの黒猫団の三皇帝だった。

アラタ「以前はどうも、皆さん」

鞠莉「小原鞠莉デース!! よろしくお願ひします!!」

ダイヤ「黒澤ダイヤと言います、何卒お世話になります」

果南「松浦果南、よろしくね!!」

3人の自己紹介に応えるように頭を下げる三皇帝も名前を名乗った。

「津ヶ島カガリです、お菓子作り担当の黒猫団です。」

「剣崎真田といいます、主にアニメ関係のレビューを中心に活動しています。」

アラタ「それじゃあ改めて、野上アラタです。ダンス担当で以前はお世話になりました」

果南「コンビグループ組むために二人の写真渡したと思うけど二人は誰に決めたの？」

ダイヤ「カガリさん、私で良ければ」

カガリ「よろしく頼むよ、ダイヤちゃん」

鞠莉「それじゃあ、私は剣崎さんと」

真田「よろしく!!」

アラタ「それじゃあ、スタジオに行こう。僕についてきて」

そして6人は路地裏を抜けて住宅街に向かった。

黒猫団スタジオ

メンバー「こんにちはー!!!」

果南「ここが黒猫団のスタジオね、一見すると普通の住宅だけど」

仁乃介「ここでいつも撮影が行われている、見慣れたりビングも今回の為にあえてそのままにしておいた」

そしてダイニングテーブルにはカットされた食材と鍋の乗った三台のガスコンロが並んでいた。

そして氷水につけた缶ドリンクと手作りのガトーショコラ。

花丸「は、早く食べたいずら〜」

ジュンヤ「今、茶碗と箸用意するからちよつと待つてて」

メンバーに茶碗が行き渡るとメンバーは缶ジュースを手天井に突き上げた。

陸「コンビグループ合同鍋パーティー、ここに開催!!」

メンバー「おおーパーティー!!」

陸の宣言と同時に鍋パーティーが始まった。

陸「カツオ出汁うまいなあ、今回の為に良いカツオ節買った会があったぜ。」

千歌「シンプルだけどこれがいいね〜」

2年生組はカツオ出汁を食べる一方で1年生組はトマト鍋を気に入っていた。

花丸「トマト鍋甘酸っぱいずら〜」

善子「真紅の魔王の果実がヨハネの魔力を強めている。まさしく千年の呪術」

巧「そのセリフどっかで聞いたような……」

竜太郎「タドルファンタジーの魔王ヴィントスの中盤戦のセリフのパロディだな」
3年生組は豆乳鍋を

果南「豆乳悪くないわね、身体に良さそう」

ダイヤ鞠莉「美味ー！ー！！」

カガリ「後でこれは雑炊にしてもよさそうだね」

真田アラタ「うん、美味しい」

曜「皆ー！ー！！鍋食べてる所悪いけど安売りの焼きそばで一品作ったよー！ー！！」

仁乃介「俺と曜の共同で作った、その名は……」

曜仁乃介「ヨキソバ！！」

陸「おお、いいなあ」

集「折角だし一つ頂いておこう」

箸を伸ばし、焼きそばを啜る陸と集はある事に気づいた。

集「ソースが濃いめだな、こうなると少しあれが欲しくなる」

陸「一杯行くなら付き合うぞ」

二人は氷水のドリンクケースから赤い缶を取り出してそのドリンクを飲み始めた。

梨子「何、そのドリンク」

集「ドクターペッパー、通称ドクペだ。濃いめの料理にこれが良いのさ」

梨子はその出来心でドクペの缶に手を伸ばし、一口飲んでみたが……

梨子「これ……凄く変な甘さがする……」

集「まあ万人向けのドリンクではないな」

善子「ドクターペッポーは魔術回路を刺激するモノ。下界の人間には分からないわ」
ドクペを飲みつつ、善子はタコ焼き機で真つ黒な何かを作っていた。

巧「なんだよそれは……」

皿に盛られた真つ黒な食べ物を目の前にメンバーたちは引いていた。

善子「墮天使の泪、恐れずに食べてみなさい」

メンバーはその墮天使の泪を食した瞬間……

メンバー「うああああああ、辛い、辛いイーーーーー!!」

その後

メンバー「zzzz」

あれだけ騒がしかった鍋パーティーも6時間経てば沈黙が続いていた。

そんな中で片付けを終えた陸は余ったドクペを飲みつつ今日撮った写真を見つめていた。

陸「楽しかったなあ、次はいつになるか……」

ジュンヤ「僕はいつでも君たちを迎えるよ」

陸「その時はよろしく頼むよ」

ジュンヤ「勿論さ」

日が沈む時間の中でジュンヤもまたドクペの缶を開けて陸の缶と乾杯した。

第9話 消失の夢／明日を取り戻す少女

鍋パーティーから数日後

ジュンヤの自宅にて

カタカタカタカタカタカタカタカタ

集「今回も良い素材を用意してくれたな、巧に感謝しないとな」

一人、機材の置かれた部屋で手慣れた手つきで動画の編集作業を行う集は机に置かれたチョコバーを口に咥えて複数のカメラの映像を繋ぎ合わせていく。

集「曲名はアウト・エデン、あいづらい曲名だな。それならもつとセンスを中二にしても良いだろう、腕の見せ所だな」

編集作業のその一方では……

ジュンヤ達のいる一階のリビング

ジュンヤ「♪」

曜「ズーローローン」

明らかに空気感の違い、その場に居合わせた果南とアラタ、仁乃介、ルビィはただ空気に馴染もうと必死だった。

ジュンヤ「まあまあ、元気出しなよ。気持ちは分かるけどこれは二人の問題だからね」
優しげだが少し舞い上がってるジュンヤはメンバーの前に紅茶とラスクを用意した。

果南「あの時の会話、全部聞いてたんだね」

曜「私、どうしたらいいんだろう。どう考えても陸君が否定しちゃうのは間違いだよ……」

アラタ「困ったな、当の本人がああの性格だから余計じれつたっていうか……」

ジュンヤ「さつきからこの話題でルビイちゃんが石になってるからそろそろやめようか」

ルビイ「ピギピギピギピギピギピギピギ」

空気を読んだジュンヤのおかげで無事に戻りました。

その後、集は3本の動画の編集を終え、梨子とゲームを楽しんでいた。

集 ガキंगाキン「やはり動きを変えてきたか」

梨子 ガキंगाキン「負けないんだから!!」

アーケード版ゲキトツロポツツによるランキングバトルに挑む二人は素早い手つきでコントローラーを連打する。だが梨子は集を甘く見ていた。

集「見事と言いたい、その攻撃パターンはすでに読んだ!!」

コントローラーを変則的に操り、梨子の読めない攻撃パターンを繰り出す。

梨子「嘘……対応されてる!!」

まるで操作パターンを切り崩すような戦術で立て直せないままゲームエンドに持っていかれた。

愕然とする梨子はリプレイを見ると完全に詰んでいたのは自分だったと自覚する。

集「なぜ勝てないか教えてあげよう、人は慣れない事を無理にやろうとすると自分のスキルを無暗に圧迫するからだ。そもそも君はゲームジャンルにスキルが当てはまっていなくてない、スクールアイドルやピアノが本来のスキルだ、ゲームスキルを満たしている僕に勝つのは叶わぬ妄想だと思ってくれ」

その言葉に梨子は本来の自分が何なのかを思い出したが飲み込むことが出来なかった。あの時犯した失敗と失ってしまった自分のやりたい事を……

梨子「ごめん、私はもう、戻れない……」

そう一言言い残して鞆を持って梨子はゲーセンから走り去っていった。

集は彼女に何か裏を感じつつ、自販機で買ったドクペのプルタブを開けた。

一方帰った梨子は部屋の中でただ泣く事しか出来なかった。

梨子「諦めたはずなのに、なんで蒸し返してきたんだろう。忘れたかったのに、どうして、怖い、怖いよ……」

かつての自分を思い出し、ただ怯える事しか出来なかった。

その頃集は自宅でPCを開き、あるワードを検索する。

集「桜内梨子 ピアノ」

すると集はある事件の記事を目にした。

集「音ノ木坂女生徒暴力事件？」

そこには集が知らなかった、梨子の過去が書き綴られていた。

梨子がかつてピアノコンクールに出場し、優勝しているがそれを妬んだピアノ二ストの音ノ木坂の生徒に暴力を受けた。

プロ入りも有望だったために梨子の背負った苦しみは計り知れず、ピアノをやめる大きな要因にもなっている事を知った。

集「これが足枷か」

集はドクペの缶を開けて呟いた。

集「相乗りも悪くないかな、彼女を蝕む悪魔とね」

そして集が動き出す事になった。

翌日 ファミレスでは……

陸「ステージ演習も様になって来たな、この調子なら大丈夫そうだな」

カメラを置き、メロンクリームソーダのアイスを頬張る。

だが千歌は不穏な話を引き出す。

千歌「そう言えば今日の練習、梨子ちゃんが風邪でお休みなただけ大丈夫かなあ」
陸「何？梨子が風邪って縁起なすぎるだろ。まあ、本人が作曲で体調崩すのは分かるけど風邪は無いんじゃないか？」

千歌「どうしちやっつたんだろう？本当に風邪なのかな？」
すると陸のスマホからラインの通知が来た。集からである。

陸「千歌、ちよつと向かう場所が出来た。行くぞ」

千歌「ちよつと、急にどこ行くの？」

陸「ジュンヤの家だ、千歌が必要だつてさ」

何も分からず、戸惑ってる千歌の腕を掴み、ジュンヤの家へと向かうのだった。

ジュンヤの家に着き、リビングの扉の前へやつて来たがそこには難しい顔でジュンヤが待っていた。

千歌「何があつたの？」

ジュンヤ「梨子ちゃんの件でね、とりあえず余り刺激しないように頼む。凄く不安定な状態だから」

その言葉に千歌は薄々嫌な予感を感じていた。千歌と陸は扉を開けてリビングへと足を踏み入れた。

そこには虚ろな瞳の梨子が集と一緒にいた。

千歌「梨子……ちゃん……」

集「すまない、この通りカウンセリングの真っ最中だ。二人にも聞いてもらうべきだと思つてね」

陸「梨子、何があつたんだ？」

梨子「私、最初から必要なかつた。求められて無かつた。逃げたい……ピアノも、スクールアイドルも……」

千歌「何があつたの？」

集「これが大まかな原因だ、この事件のトラウマから現実逃避していたらしいが遂に限界を迎えた」

新聞記事のコピーを見せると千歌は身体を震わせた。

千歌「酷い、こんなの無いよ……」

記事には梨子が生徒から受けた暴力と暴言が綴られていた。梨子は記事を手にして涙ながらに自分の気持ちを千歌に伝えた。

梨子「こんな、私が……音楽を続けていていいのかな？私は嫌われてる、私がおし音楽を続けていたら、皆に迷惑かもしれない、私はただ、千歌ちゃんや皆に私みたいな辛い事に遭わせたくないの……私は……」

集「天才は皆怖いさ」

すると集は梨子に寄り添い語り始めた。

集「持つている才能が故に、周りの凡人とはスケールが合わない。それ故に周りの凡人は自分より優れた人間に悪意を持つのは当然だ。だがそれは言い換えれば才能を持つとうとしない弱者のハツタリだ、粹がるだけで勝ったつもりの小物に僕は興味ないね」
集は梨子の頭を撫でて、話を続ける。

集「人間の才能は得体の知れない悪魔だ、だがそれは時として相乗りすればいい方も悪い方にも転ぶ、まさにジョーカー。またその過程で罪も生まれる。僕の場合の罪は、自分以外の人と関わる事が臆病な事かな。そこで君に聞きたい。君の罪が何なのか」

集は梨子に指をさして言った。

集「さあ、お前の罪を数えろ!!」

梨子「私の、罪は……」

記憶を巡らせ、梨子は一つの罪を答えた。

梨子「自分の才能を捨てて、逃げた事……」

集は満足したように梨子を慰めた

集「それがわかればいい。自分の存在に悲観していたら先に進めない、それに……」

集は梨子の前に千歌を誘い伝えた。

集「千歌は君を見捨てない、受け入れてくれる。そうだろうか？」

千歌「梨子ちゃん、私は梨子ちゃんが必要だと思う、皆とスクールアイドルをやりたい!! 梨子ちゃんは、どうかな？」

梨子「やりたい、千歌ちゃんと皆で!!」

苦しみを乗り越えた梨子は晴れて自分のやりたい事を取り戻した。

その様子を陸と共に眺めつつ、集は陸に伝えた。

集「これからが楽しみだが、陸も早く自分に気が付いた方が良いでしょう」

陸「何の話だ？」

集「いや、なんでもない」

第10話 スカーレット・ナイト・ムーン

浦の星 屋上にて

ダイヤ「左サイド、もつとポーキング意識して」

果南「センターもつと粘り強く、歌もバランスを崩さない」

大会に向けて練習に励むメンバー、陸はその様子をカメラに収める。

気が付けばビデオカメラのバッテリーがすり減っていた、2時間続けて撮影したのもあるだろう。

陸は鞆の中に銃のようにバッテリーを落とし、新しいバッテリーをリロードする。思えば結成当時は少ない人数で最低限の練習しか出来なかったこの部活も気が付けば仲間が増えてやれることが増えたのも全ては皆が信じてくれた。

これが一番大きいかもしれない。

それに何と言つても凄いのは3年生だ。

初期のスクールアイドルメンバーだけあって体力、美貌、ダンスも完璧だ。フオーメーションも出来てきたのだが一つだけ問題もあつたりする。

ルビィ「ピギィ!!」

ダイヤ「ルビイ!!」

突然肝心な部分ステップを踏み違えて転んでしまったルビイ。

ダイヤがすぐに駆け寄る。

ダイヤ「ルビイ、大丈夫ですか？」

ルビイ「ごめんね、でも大丈夫だよ。ははは……」

すると近くにいたジュンヤは救急箱を手にルビイに声をかける。

ジュンヤ「うまくできてたのに残念だったね、でも気にすること無いよ。失敗は誰で

もあるから」

ルビイ「ジュンヤさん、皆、本当にごめんなさい」

陸「本当に大丈夫なのか、大会近いんだろう」

千歌「きつと、何とかなるよ。絶対!!」

陸「信じるほかないな、期待してる」

陸はそう言いつつ、ドクペの缶を開封した。

その後 集の家では

カタカタカタカタカタカタカタカタ

集「黒猫団の布教のおかげで千歌達に一定のファンがついて来ている。この波ならさ

らに大きくできるよう素晴らしい動画を完成させてより多くの人に、頑張らなくては」

今日撮影した動画の編集が行われていた。

黒猫団スタジオ リビング

陸「なあ、仁乃介。お前が作ったトレーニング表、ルビイにはちよつと向いてないんじゃないか？」

仁乃介「やらせてみて俺もそう思った。ちよつと荷が重すぎたかなって」

ジュンヤ「ダンスパートを担当してる僕から見ると確かにちよつと辛そうには見えるね、とは言っても急な路線変更はチームの演技バランスを崩す事にもつながるから」

陸は紅茶を啜りながらジュンヤにある事を提案する。

陸「練習後にジュンヤの所有してる音楽室で蹟く演技を改善できるように指導したらいいんじゃないか？」

ジュンヤ「的確に問題点の克服をするなら何が悪いのかを探るって言うしね。その役割、僕が引き受けよう。後でダイヤ先輩にも相談しておく」

その後 音楽室

ジュンヤ「成程、つまりルビイちゃんはダンス終盤の演技の足踏みが痛いという事か」
ダイヤ「それならそうなんって言わなかったんですか？」

ルビイ「ポジション変えられる様な事したら皆に迷惑かもしれないって……」
ジュンヤ「事情は分かった、でも我慢や黙ってる事は良くない。思ってる事があるな

ら素直に言えば僕もそれなりの対応をするから」

ルビィ「本当にごめんなさい」

ダイヤ「良いんですよ、正直に言うてくだされば。私もきつく当たりすぎた様ですし」
ジュンヤ「それじゃあ、後は僕に任せて。ダンスフォーメーションを負担の無い形で再編集するから」

ダイヤ「相談して良かったですわ、おかげで可愛い妹を助ける事が出来ましたし」
ルビィ「……」

無言で顔を赤くしジュンヤの向かった方をじつと見つめている。その様子にダイヤは微笑ましいと感じていた。

一方陸は……

板前寿司 火流院

陸「アジと炙りサーモン、後しめサバを」

仁乃介「いつつもそれだな、もつと良いの頼めばいいのに？」

陸「ウニとかイクラよりかはこういうのが良い。飾らないのも俺の流儀だ」

寿司屋で暇をつぶしていた。

ジュンヤが部屋で作業を始めてしばらく経った頃

ジュンヤ「難しいステップや腕の動きは極力抑えた。後は音楽に合わせたフィナーレ

パートを形を変えずに色々動きを分かりやすく……」

ジュンヤがパソコンに向かって二時間、それなりに改善した内容だが後はメンバーやルビイ次第、ジュンヤも出来る限りの最善を尽くそうとの今夜は徹夜作業を決め込んでいた。

メガネを外して目薬を両目に垂らすと10秒間何も考えずに目を閉じた。

目を開いて作業を始めようとメガネをかける。

ジュンヤ「よし、もうひと踏ん張りだ」

すると自室をを叩く音がジュンヤの耳に入る。ジュンヤはメガネを外して扉を開けた。

ガチャツ

ルビイ「すみません、取込み中でしたか？」

ジュンヤ「ルビイちゃん、こんな時間までずっと僕の家に？」

時計を見れば夜の7時、本来なら家族が心配する時間帯なのだが……

ルビイ「ちよつと、一息つきませんか？」

ジュンヤ「ん？」

ジュンヤはルビイについていくとそこには……

ダイヤ「待っていましたわ」

リビングにはエプロン姿のダイヤと机の上にはカルボナーラとサラダが用意されていた。

ダイヤ「ジュンヤさんのキッチンを貸していただきましたお口に合えば嬉しいですが……」

ルビィ「ジュンヤさんの為に頑張って作りました、とは言ってもサラダだけしか出来なかつたけど……」

ジュンヤ「それじゃあ、頂こうかな？」

ジュンヤは冷蔵庫から一つの瓶を取り出す。

ルビィ「それは……」

ジュンヤ「スカーレット・ナイト・ムーン、パスタを食べるときに一緒に飲んでるブドウの炭酸飲料、一緒に飲もうと思ってたんだ」

3人は席に着くとグラスにスカーレット・ナイト・ムーンを注ぐとグラスを交えた。

ジュンヤはカルボナーラを口にすると嬉しそうな顔で感想を述べる。

ジュンヤ「僕とは違う、良い個性のカルボナーラだ。凄く美味しいし病みつきになりそうだ」

ダイヤ「ありがとうございます、作って良かったですわ♪」

そしてジュンヤはカルボナーラの横のシーザーサラダを見る。

ルビィ「ごめんなさい、うまく切れなくて見た目が……」

ジュンヤ「そんな事無いよ、問題は見た目より味だよ」

サラダを口にする。ルビィの心拍数は振り切れていた。

ジュンヤ「ルビィちゃんのを愛を感じる、頑張って作ったんだね。美味しいよ」

ルビィ「ピ、ピギイイイイイイ!!」

ジュンヤ「ちよ、ルビィちゃん、大丈夫かい？」

ダイヤ「あらあら、ちよつとジュンヤさんのスパイスが強すぎたかもしれないですわ
♪」

意味深な笑みを浮かべるダイヤは心の中で一つの言葉を綴るのだった。

ダイヤ（ジュンヤさんならきつとルビィを大事にしてくれる、ジュンヤさんが私の義
弟になるのはいつか……楽しみですわ♪）

そしてルビィは顔を赤くしてショートした後はジュンヤの手でソファアーに移される
のだった。

第11話 プロテインコンビの恋愛方程式

ライブまで後2週間を切った頃、仁乃介と曜の二人はカガリの実家の駄菓子屋に来ていた。

仁乃介「カガリ、ラムネ2本頼むわ」

カガリ「今持つてくるね、200円そこに置いていて」

ラムネを待つ間、曜は店内のお菓子の目移りしていた。

曜「懐かしい、記憶にあるお菓子がいっぱいある」

仁乃介「チョコレートバット、野球部時代の青春だな。一本ぐらいなら奢ってやるぞ」
曜キラーン「奢ってくれるの!!お願いします!!」

仁乃介「俺じゃなかったら、多分誘拐されるタイプだぞ」

カガリ「お待たせ、ラムネ2本。それとまだ買う物あるかな?」

仁乃介「チョコレートバット、2本頼む」チャリン

仁乃介は代金の60円を渡す。

仁乃介「それじゃあ、店の外で頂くぜ」

カガリ「ごゆっくりどうぞ」

店の外に出るとラムネを開ける。

曜「あああああああ!!」

仁乃介「零れちやったね、でもこれが醍醐味だから」

二人はラムネを口にする。と仁乃介が曜に話を振る。

仁乃介「陸と千歌の嬢ちゃんのことなら心配ないと思うが、何が不安なんだ」

曜「ちよつと、急に何でその話題!!」

仁乃介「触れたらまずい話だったか、これは失礼」

顔を赤くしてカタカタしている曜を見て仁乃介はニコニコしている。

曜「一番心配なのは陸君だよ、ああくなんですんなり受け入れられないのかな。自覚出てるんだから余計にじれったい!!私の中じゃこんな見えて落ち着かないのは初めてだよ」

チョコレートバットの袋を破り、荒くガリガリとリスのように齧る曜を見て仁乃介は論ず。

仁乃介「気持ちに分かるが、これは本人の問題だからなあ。陸の場合は受け入れる以前に恋愛に弱い事と不器用なところの2点が引つ掛かって思うように事をうまく運べない。それさえどうにかできれば陸はある意味で普通の恋する男子なんだけどな」

曜「恋愛になると明らかに初心過ぎてこっちも疲れるんだけど。後カメラに逃避しちゃう癖もメンドイ……」

仁乃介「カメラの先しか見ていない陸ならではの世界って奴か？」

曜「陸君って異性を意識してないのかなあ」

仁乃介「本人に聞いて確かめるほかないか。俺の方から陸の相談に乗るから、まあ落ち込むなよ」

曜「「ありがとう……」

すっかり萎えてしまった曜を見た仁乃介は心の中で「この話、振るべきじゃなかったなあ」と少し罪悪感を感じていた。

そんなこんなで数日後、学校帰りにクレープ屋で陸にクレープを奢る事を条件に陸と話し合いの場を設けることが出来た。

陸は嬉しそうにカスタードのクレープを頼み、テラス席で話を始めた。

陸モグモグ「それにしても、クレープの奢りは感謝するが……話す以前に曜が落ち着いてないな。俺に話あるとは……そう穏便な話じゃ無さそうなのはわかる。何が言いたい？」

陸はクレープを飲みこむと仁乃介もある程度陸の事を分かった上で話を始めた。

仁乃介「陸、お前にとって千歌の嬢ちゃんはどういう存在なのか？それをお前に聞

きたい」

「!!」

物凄い動揺の仕方をする、陸は思わず黙ってしまった。

曜「答えて、陸君。もう気付いてるんだよね？」

陸は少し考えて本音を口にした。

陸「俺みたいな男が……千歌と付き合ったら苦労すると思ったから。今まで否定してきた。でも心のどこかで千歌の優しさを求めていたのは本当だ。表に出さなかつたけど……」

仁乃介「やつぱり、不安だったのか？」

陸「ははっ、不器用な俺についてたらきつと気を使わせると思ったからさ。どう見ても支えられる男に見えないだろ。性格的に……」

曜「そんなどうでもいい理由で恋心否定してたの？」

陸「こんな事人前で話すのはこれが初めてだよ。カッコ悪いな、俺の本心」

曜は陸の本心を聞くとどこか嬉しそうな顔で肩を叩いた。

曜「陸君は確かに不器用で付き合ったら苦労するかもしれない。でもお互いのそういうダメなところを支え合うのも恋愛なんだよ。だから恋をしている自分自身に胸を張っていいんだよ」

仁乃介「素直になれよ、ウブな少年。一度きりの初恋を大事にしろよ、勇気が欲しいなら一発背中叩いてやる」

陸は初めて感じた優しさに心が軽くなり、席を立つ。

陸（まさか、助けられる羽目になるとは……でも、悪くない）

陸「仁乃介、手加減なしで頼む。一発後ろからかましてくれ」

仁乃介は手に力を込めて拳で背中に一発叩き込んだ。

ドゴォ!!

陸「グウウウウウウウウ……」

曜「ちよつと、陸君大丈夫!!」

渾身の一発が陸の背中に直撃してその場にしゃがみ込む陸に曜が背中をさする。

陸「一気に目が覚めた、これで前に進める……受け入れられた。あいつへの想い……」

仁乃介「俺は応援するぜ、陸の好きなようにやればいい」

陸「だが、その前にやる事をやらないとな」

力の宿った瞳で陸は宣言する。

陸「ラブライブで勝つぞ、俺の想いはこれが終わらない限り、伝えられない。必ず

……」

自分の心を受け入れた陸は新たな想いを胸に前に進み始めた。

その頃、ラブライブも本戦に向けて動き出していた。

東京 秋葉原

??? 「いよいよ始まるか、今年はどんな伝説を見せてくれるのか楽しみだねえ」

謎の男の後ろではあの人物がコーヒーを嗜んでいた。

??? 「一番楽しそうですね、赤峰社長。」

赤峰 「そういう君こそ、今回のラブライブでは生放送を仕切るんだろう。君がラブライブ運営部に申し込んだんじゃないか」

??? 「王としてラブライブの参加者を見守る、それが俺、

心咲護としてのやり方だから」

第12話 追憶の王と円盤人形の旋律者。

ラブライブ予選の前日、スクールアイドル部、いや今はもうこの呼び名の必要はない。呼ぶならそう、アクアと黒猫団の双方は新幹線に乗って東京へと向かっていた。

ダイヤ「ジュンヤさんがつけてくれたグループ名、とても素晴らしいですわ!!」

仁乃介「最初は陸に任せただがどれも玉砕してジュンヤに泣きついたわけだ。最初から任せておけば良かったのに本人が無茶振りするから……」

千歌「その結果がああ山盛りの駅弁って事？」

机を見れば何箱も積まれた駅弁をやけ食いする陸がいた。

陸ガツガツゴクツ「今日はいつにも増して食いまくれるな。ご当地の駅弁ほど目にしたない物が沢山食えるからな」

ルビィ「あんなに食べて大丈夫かなあ」

ジュンヤ「言つとくけど陸ほどの食いしん坊はこの程度で体壊すような事無いから大丈夫だよ。一度も風邪を経験したことのないぐらいだから」

ダイヤ「えええええええ!!風邪にかかった事無いって……」

ルビィ「一体どんな体の構造してるんですか!!」

陸「あくお前ら顔が近い、それとここ新幹線の中の食堂車だから出来るだけ大声出すな」

そう言いつつ陸は駅弁の包み紙を開けるとある話を語り始めた。

陸「因みにラブライブについてちよつと調べた時に、その後のラブライブに影響を与えたミュージズの先導者の話を知っているか？」

するとダイヤはズバリ答えた。

ダイヤ「勿論存じていますわ、若くしてミュージズを勝利に導き、ラブライブの運営から王として迎え入れられた男子高校生。現ソニツカーズギタリスト兼ボーカルの……」

机のメンバー「心咲護!!」

そして語られるのは……王の記憶……

秋葉原 ビル7階

心咲「あれから5年、気が付けばあの日から随分過ぎたな……」

赤峰「あの頃の栄光、まだ恋焦がれてるのか？」

心咲「あの時以上の事は求めてませんよ、今はラブライブの王としての責務をこなすだけです」

心咲は缶コーヒーを開けると赤峰に語り始めた。

心咲「始まりは、あの春の日。穂乃果ちゃんと再会して舞い上がっていたけど、運命

の悪戯は俺を笑って引きずり込んだ。ラブライブを目指して南さんと園田さんと最初のスタートを、その後に加わった小泉さん、星空さん、西木野さん。部室を提供してくれた矢澤先輩、俺達の活動にフォローを入れてくれた東條先輩、スクールアイドルのダンスを最前線で教えてくれた絢瀬先輩。気が付けば仲間が増えていて、楽しかった」

陸「共に活動をする中で、心咲を巡る恋もあつたそうだが……結果的に幼馴染の穂乃果を選ぶと決めていた。ハロウィンライブで生舞台に参加して心咲自身がマイクを取った時は多くのファンの前で自分がバンドとして舞台上がる事を胸に歌った。その後ラブライブ本戦に出場、アライズを下して勝ち上がったミュージズと心咲の存在は最早語る必要もないレベルだった。

心咲・陸「そして、王としてその存在を確立させた」

千歌「ラブライブの王様、心咲さんは本戦に来るんだよね!!」

ダイヤ「勿論ですわ、今回はテレビの生放送にMCとして登場予定なのでスマホの生配信録画しておきましたわ♪」

陸「とりあえず、ペンライトと大漁旗その他応援グッズも用意しておいたぜ。いつでも突入可能だ」

仁乃介「大漁旗は俺が2週間かけて作った代物だ。客に邪魔にならない程度で小型化したから安心してくれ」

千歌「陸君、私頑張るから応援してね☆」

陸「あ、ああ……応援するけど顔を少し近づけるのはよしてくれないか？」
すると食堂車からあの二人が入ってきた。

梨子「あら、キスの途中だった？」

陸「き、きききききッ」

千歌「そそそ言うのじゃないよ、ただ私は……」

顔を赤く染めてテンパる二人を微笑みながら梨子は楽しんでた。

そして集はあるサイトをメンバーに見せて席に着き、語り始めた。

陸「そのサイトは確か……」

梨子「DDSの公式サイトよ」

千歌「DDS?」

集「DDS、通称ディスク・ドール・シンフォニクス芸能事務所。心咲護の活動の拠点であり、多くのスクールアイドルが在籍するライブ運営委員会の系列事務所だ」

心咲「ライブに優勝したあの後、俺はその後もライブの運営に呼ばれ、1年を重ねて人材発掘部のオーディションを受けつつ自分の才能を完全な物にした。その後にあなたが言った才能あるライブの出場者の芸能活動を支援する夢。それに俺はついていく事を決めて、今あるこの場所こそ……」

集「円盤人形の旋律者、ディスク・ドール・シンフォニクスと言う訳さ」

梨子「ラブライブで活躍する大多数の人がここからのスカウトを受けているの」

ダイヤ「心咲さんはやはり偉大な人ですわ」

ルビィ「ソニッカーズの音楽ならスマホに入ってるから後で聞こうよ」

アナウンス「間もなく、この電車は東京駅、東京駅に到着します」

東京駅の改札口を出た、アクアと黒猫団はここで別れる事となる。

竜太郎「東京キターーーー!!」

花丸「キターーーーずらーーー!!」

ルビィ「ほら、行くよ。黒猫団とは別のホテルだから」

すると陸は千歌に声をかける。

陸「千歌、これがお前にとって、力になってくれると思う」

陸が渡したのは絆と書かれたプレート付きの熊のぬいぐるみキーホルダーだった。

千歌「可愛い!!これどこで買ったの?」

陸「買ったんじゃない、作ったんだ」

千歌「え?」

すると陸は手袋を外す。その手は沢山の絆創膏で皮膚を覆っていた。

陸「不器用な俺だから、こういうのは初めてやったんだけど。うまく出来なくてこの

有様。でも千歌が絆を信じて頑張れるように、少しでも力になりたかった」

その言葉を聞いた千歌は身体が熱くなっていた。

陸も平気な顔をしているが内心恥ずかshがっていた。

キャリーケースを握りしめてサムズアップをした。

陸「頑張れよ、きっと大丈夫だ。会場で待ってるぜ」

やたら大胆な事をしたと思ひ、顔を赤くしつつ黒猫団の下に向かった。

千歌「ありがとう」

去って行く陸の後ろ姿に千歌は心拍数が昂っていた。

第13話 夢への序曲

ライブ予選会場

仁乃介「いよいよだな」

カガリ「しっかり応援しよう、きっと皆の力になるはずだから」

陸「……」

集「カメラが使えないのが不満か？陸」

陸「そういうのじゃなくて……」

会場入り前 自販機コーナーにて

陸「本番前に俺を呼び出して、なんかあったのか？」

陸はドクペの缶を開けるつつ話を聞く。

千歌「この後のパーティーの話についてなんだけど……」

黒猫団とアクアのメンバーは予選後に東京のホテルでパーティーをする約束をして

いた。

今回わざわざホテルの予約と同時にジュンヤが予約してくれていた。

千歌「パーティーの席、陸君と二人きりじゃ……ダメかな……」

陸「え？それって……」

千歌「い、い、いや、深い意味じゃなくて、お守りのお礼とか今夜ぐらい陸君と……何言ってるだろう。私……」

陸「まあ、深くは考えなくておこよ。千歌、今夜は……」

去りゆきざまに陸は千歌の耳元で囁いた。

陸「退屈させるなよ」

千歌「!!」

少し誤解を招きかねないが陸はそう言うつもりで言ったわけではない。

だが千歌の頭の中で無意識にいかかわしい妄想が広がっていく。

千歌「それって、今夜私は陸君と……」

曜「うわー乙女だわー純粋な乙女だわー」（棒読み）

千歌「そ、そう言うのじゃないからー……!!」

少し弄られた感が否めないがとりあえず回想ををしている間にアクアの番が回ってきた。

ステージに立つアクアとそれを静かに見守る黒猫団と観客。

そして楽曲は、恋になりたいアクアリウム

水のエフェクトと一体化するダンス。

歌声とそれぞれのアピールが観客を盛り上げる。

それと同時に応えるようにペンライトを振る黒猫団。

次第に会場を覆う歓声とアクアの歌声はボルテージを上げてゆき、最後に七色の光と共に見事パフォーマンスをこなして見せた。

観客を多くがアクアに声を送り、陸も満足気に呟く。

陸「見事だったな、良い物を見せてもらった」

その後予選は本戦入り10組中の4位と言う記録で本戦に出場することになった。これ以上に無い記録でスタートする事になった。

D D S 本社

心咲「今年もライブは強豪ぞろいだな。その中でも注目すべきは今回が初出場のアクア。彼女たちはどこまで進めるかな？」

赤峰「君のプロデュースで出場してる彼女たちに悪いと思わないか？そもそも注目すべきスクールアイドルは彼女たちだというのに」

心咲「無名のスクールアイドルほど目が行くものはありませんよ。何故なら自分がそういう人間だったから」

赤峰「全く、腹の底が読めないね。それもまた王様らしいというか……」

心咲「果たして俺の育て上げたスクールアイドル、セイントスノーを超える逸材は誰

なのか、楽しみだ」

ホテルの食堂にて

陸「流石は東京、料理のグレードも段違いだな」

フルコース料理を嗜みつつノンシュガーのジンジャーエールをグラスに注ぐ。

千歌「ねえ、今日の私、アイドルに見えた？」

陸「勿論だよ、凄く可愛かった」

お互い視線を逸らし、顔を赤く染めて無言になる。

鞠莉「あら？とてもホットで素敵なお関係デスね」

花丸「甘い空気の元凶はこのリア充爆発しろコンビだったずら」

陸「誤解があるが俺は別にそう言うのじゃ……」

果南「じゃあ、陸君は何故ライブ後に千歌のアイドル衣装何枚も撮ってたのかな？」

果南が二人を見つめてニヤニヤしているため、ジンジャーエールを飲み干して断言した。

陸「間違っても俺はまだそういうの早いと思ってるんだ。だから余りじらすなよ」

善子「見える!!」

巧「おい、急にどうした？」

善子「見えるのよ、陸の本心。あれは鋼鉄の鎧でガードしつつ、その中に純粋なクリ

スタルを隠している。間違いなく素直になれない男のスイートハート!!」

巧「それ通じるの俺だけだぞ。後お前の顔から嫌な空気を感ずるんだが……」

ジュンヤ「皆、他人の恋愛見るのは面白いと思うけどくれぐれも足を突っ込みすぎないようにしてよ。陸はこういうの一番デリケートなんだからね」

全員が空気を読んで二人を面白がるのをやめた。

胸を撫で下ろす陸は千歌に誘いを入れる。

陸「このホテルの食堂近くに良いジュエリート屋見つけたんだけど、一緒にどうかな？奢るよ」

千歌「いいの!! 行く行く!!」

そして部屋に戻る前にジュエリートを購入し口に行っている中で千歌に陸は問いかけた。

千歌「なあ、千歌。今日鞠莉たちにからかわれてふと思ったんだけど……」

千歌「何?」

陸「千歌は誰か好きな人とかいたりするの?」

???「ブフォ!!」

ジュエリートを吹きだしたのは黒パーカーとツインテールにまとめた善子だった。案の定鞠莉から司令を受けて盗聴と録音をしていた。

善子「それ、ストレートに言う男がどこにいるのよ!!」

善子の存在を気づかぬまま二人は会話を進める。

陸「ごめん、急にこんな無茶な質問して……」

千歌「……」

千歌の心拍数が急激に上がると同時に千歌はこう呟く。

千歌「私みたいな人でも守ってくれる人、それって多分……もう昔から近くにいたと思うんだ。陸君も一番分かっているはずだと思う。でも好きかどうかは曖昧なんだ。友達としてなら……」

すると千歌の顔は最早赤みを帯びている他に目から少し涙も出ている。

事に気づいた陸は頭を抱えて呟く。

陸「ごめん、お前の気持ちはまだ分からないけど言葉を残しておく。俺みたいなのは多分助けられる前に凄く苦勞するぞ。そう言う男は覚悟決まってから手を出せよ。全く……」

そう言つてジェラートのコートを飲み込み、陸は部屋へと戻った。

その様子を見て千歌は笑顔で呟く。

千歌「必ず、私のモノにしてあげるから。陸君……」

盗聴器をしまい、善子は無言でジェラート屋を去っていった。

そして、物語は新たなページへと向かいつつあった。

シリーズン2

第14話 黒の世界

9月 サーターイーセブンアイスクリームの飲食スペース。

千歌「登校日は力入らない……」ズーン

ルビィ「ルビィは徹夜明けで眠い……」ズーン

目にクマの出来た二人はアイスを齧ると目の前でコーラフロートを啜る陸とアイスサンドビスケット嗜むジュンヤの二人が座っていた。

陸「見る影もねえなあ、一応はアイドルだろ」

ジュンヤ「夏休みにどんな生活してたらこんな状態に……」

ルビィ「忘れた宿題をラスト一週間でお姉ちゃんと片付けた……頭の中で英語や数式がぐるぐる」

千歌「私はクーラーの効いた部屋でお菓子食べながら雷撃ディーンズマガジンを読んでゴロゴロしてた」

ジュンヤ「自業自得としか言えない……」

陸「それだけ自堕落な生活してればそうなるぜ。ラブライブ本戦を控えてるんだか

ら、今の内に以前の生活リズム取り戻せ」

ジュンヤ「まあ、頑張ってほしい感じではあるね」

陸「あつ、そういえば今日の動画の撮影って巧だよな」

ジュンヤ「心配ないよ、連絡して今頃カメラ回してるはずだから。後撮影に善子ちゃんもついていくようだし」

ルビィ「ルビィは早く家に帰って眠りたい……」

ジュンヤ「それなら家まで送っていくよ」

ルビィ「ジュンヤさんありがとうございます……」

その頃 撮影中の巧と善子は……

巧「今日のテーマはドソキホンテンで武器レプリカの購入と紹介だ」

善子「この店舗はコスプ……いや闇の神器に一番力を入れているからヨハネも世話になってるわ」

巧「普通にコスプレって言えよ、とにかく店の人に許可とって撮影始めるぞ」

店舗に入ると店員に声をかけて許可を取り、二人は撮影を始めた。

善子「巧君、これとかどうかしら？」

巧「ギ○レンラウザーのレプリカか、それって後ろに弾を飛ばすマガジンがあるだろ？」

善子「残念ながら、弾は別売りみたいね。それでもこの重さは最高に癖になりそう♪」
巧「俺はこんなの見つけた」

善子「それは英雄王の宝具、乖○劍エア!!」

巧「こいつはどうやら電池で回転するみたいだが電池は別売りだな」

善子「すぐに遊べないのじれったいわね」

巧「まあ、気に入ったもの買えばいいだけだろう。いいと思ったモノは手に入れて損は無いからな」

善子「それならこれとか振り回すのに丁度いいからこれにするわ」

巧「断○の劍もあるのか、それなら俺はこいつを買おうかな?」

善子「ダークリ○ルサーとエリ○シデータの双劍、悪くないわね」

巧「よし、会計に行くぞ」

善子「また一つ大いなる力を手にしたわ!!」

そして二人は劍を持って海岸沿いにやって来た。お互いはレプリカの劍を手に姿勢を構える。

巧「お互い1回2の腕に刃を当てたら勝利だ。カウント3で始める」

善子「ヨハネの劍の味を教えてあげる」

巧「3、2、1」

巧・善子「勝負!!」

刃が軋み、お互いは剣をぶつけ合う。

善子「なんて容赦の無い剣裁き、巧君はこれをどこで……」

巧「もつとすごいを見せてやろうか？」

すると巧は足を捻るように回転を付けてジャンプし、上から斬り落とすように剣を下ろす。

善子は何が起きたか把握できないまま剣でガードするがあつさりと二の腕を取られてしまった。

巧「俺の勝ちだ……」

善子「今の……何？」

巧「新体操の演技を独自に改ざんして編み出したんだ。驚いただろ？」

剣を鞘にしまうと善子は思いつき巧に対してこの言葉を叫んだ。

善子「そんなの……勝てる訳ないでしょオ……!!」

撮影後 とある甘味処にて……

善子「んんんー♡このチョコレートみつ豆美味しいじゃない」

巧は行きつけのこの甘味処で和風スイーツを嗜んでいた。

机には団子やきなこ餅などが置かれている。

巧「気に入ってもらえて良かったよ。追加注文いくらでもしてくれ」

善子「大学芋いいかな？」

巧「好きにしろ」

一方東京では ディスク・ドール・シンフォニクス事務所では……

ガチャ

赤峰「仕事お疲れ様、本戦前のバラエティー特番はどうだったかな？」

ウイスキーのロックを飲む赤峰の横で帰ってきた心咲が座る。

心咲「音楽系バラエティー番組は仕事として楽な方だよ。今日はMCにラブライブの裏側を知りうる限り話してきたさ」

赤峰は心咲の前にロックのウイスキーを注ぐ。

心咲「残念ながら俺、ウイスキーは苦手なんですが……」

赤峰「まあ飲んでみたまえ」

心咲は苦い表情でグラスのウイスキーを飲み干すが……

心咲「つてこれただのストレートティーじゃないですか、警戒して損した」

赤峰「ウイスキーを無理に勧めるつもりはないよ」

心咲「そういう冗談はやめてほしいよ……」

席を立つと東京の街を眺める。そんな心咲に赤峰はある話を振る。

赤峰「心咲君、ラブライブの本戦におけるテーマは決まったのかい？明日が提出だろ
う」

心咲は手に持っていた缶コーヒーを開けて口にするとう答を返した。

心咲「新たな時代を祝福する。その世代のスクールアイドルの輝く舞台を俺は天使の
宴の時間に例えている。

そう、テーマは……エンジェルパーティータイム」

第15話 家電量販店はロマン!!ゲーム買おう!!

黒猫団スタジオの二階、集は編集作業が佳境を迎える中で備え付けの引き出しからお徳用のクランチチョコレートバーを取り出して口に咥える。

作業を始めて3時間近くは机の上で集中している。

巧と善子の素材動画にエフェクトやテロップを納得が行くまで調整、貼り付けを行い、動画を仕上げていく。

そしてそこから効果音等も動画に合わせて入れていき、作業から3時間40分を持って動画を仕上げる事が出来た。

集「今日の投稿はこれで完成……2時間は休めるな……」

時計の針は朝5時を指していた。

集は引き出しから睡眠薬を取り出してそれをペットボトルの天然水と一緒に服用するとメガネを外してベッドの上に倒れ込んだ。

PM 7:30

集は目が覚めるとスマホに手を伸ばして黒猫団の公式インスタグラムやツイッターを確認する。

投稿した動画は2時間の内に3万回再生されたようだ。

本人も満足そうにニヤリと笑ういつものジャケットを着こんで部屋から一階へと降りて行った。

シャワーを浴び終わるとタオルを肩にかけてリビングの扉の横にある撮影シフト表を見ると今日の撮影当番は竜太郎であることを確認してリビングへと足を踏み入れた。

ジュンヤ「編集お疲れさまだね、疲れはどうかかな？」

ジュンヤはトーストにハムエッグとヨーグルトを用意してティーカップに紅茶を注ぐ。

集の横ではソファアーの上で陸が眠っていたがジュンヤが声をかけるとすぐに目覺めた。

ジュンヤ「陸、ご飯できたから食べようか」

陸「シャキツ」待ってた、早く食べよう」

集「お前本当に食事に素直だな」

陸「ジュンヤ、今日は仁乃介来ないのか？」

ジュンヤ「仁乃介は竜太郎と花丸ちゃん撮影の手伝いに同行してるよ。朝食も先に食べていったから心配ないさ」

陸はトーストにハムエッグを乗せて齧る。幸せそうな陸に集は声をかける。

集「陸は本当に食べてる時が一番楽しそうだな」

陸「食べる事は今日の活力、朝食はしっかり食べないと」

陸はそう言つてトーストを食べ終わり、ヨーグルトにメープルシロップをかけて喉に流し込むとビスケットと紅茶を楽しみ、朝食を終えた。

ジュンヤ「陸、暇なら買い出しに付き合つてくれるかい？手伝うならお菓子とか好き
なだけ買つてもいいけど？」

陸「マジか!!それじゃあ、お徳用スパイスジャーキー買つてくれるなら一緒に行くぜ」
ジュンヤ「任せて、今から準備するから10時に出発しよう」

陸「集はどうする？」

集「留守番してるよ、眠りたいからな」

集はそう言つて二階の編集部屋へと戻つていった。

ジュンヤ「恐らく今日も徹夜になりそうだ……」

陸「ドクペとカツプヌードル補充しておくか」

一方で朝食を終えて動画撮影を始めた竜太郎たちは……

竜太郎「どうも、黒猫団の竜太郎と」

花丸「アクアの花丸ずら!!」

仁乃介「本日カメラ担当の仁乃介だ」

竜太郎「今回お邪魔してるのは地域で一番大きいハマダ電機。今日のテーマはズバリ

!!花丸ちゃんに初めての携帯ゲーム機、ゲーム・バグヴァイズを買ってあげる動画です」

花丸「皆が持つてるゲーム機なのでマルも欲しかったぞら♪」

竜太郎「それじゃあ、ゲームコーナーに行こうか。今回はソフト付きの限定版で好きな物を買ってあげるよ」

花丸「楽しみずらく♡」

そしてお店の3階にあるゲームコーナーまでエスカレーターを使って向かった。

花丸「ゲーム機がいっぱいぞらく♡」

竜太郎「それじゃあ欲しい物を選ぼうか、因みに俺は最近ジェットコンバットとギリギリチャンバラがお気に入りだけど……」

花丸「マルは皆と遊べるゲームが欲しいぞら。以前2年生がやってたあのゲーム♪」

竜太郎「あのグループがやってたゲームは恐らくバンバンシューティングかシヤカリキスポーツとかかな？」

花丸「ドラゴン討伐とかのゲームだったぞら」

竜太郎「ああ、ドラゴナイトハンターZか。でもあれは花丸ちゃんには難しいと思うな……まあ、俺もやってるし基本的な事はレクチャーするよ」

そうやって竜太郎はゲーム・バグヴァイズのドラゴナイトハンターZ限定版を手に取り

る。

竜太郎「この中に本体と充電器に持ち運びケースと液晶フィルムにソフトの一式が始めから入ってるからすぐに遊べるようになってる。その分値段張るけど今回は花丸ちゃんの為にこのセットをプレゼントするよ」

花丸「ありがとうずら〜♡」

竜太郎「店で抱き着くなよ、まあいいけどさ」

客（ウワーカッブルダー イチャツイテルー リアジユウバクハツシロー）

仁乃介「動画としてこれ心配になって来たんだが……」

会計後にプレゼント包装されたゲーム機を抱えて嬉しそうな花丸を見て竜太郎は聞いた。

竜太郎「今日の撮影は花丸ちゃんにとってどうだった？」

花丸「すごく嬉しくて竜太郎さんともっと色んな撮影してみたいと思ったずら〜」

竜太郎「良かった、俺も楽しかったし機会があればまた撮影したいな」

仁乃介「それじゃあ、そろそろカメラ止めるぜ。」

竜太郎「皆さんまた明日」

第16話 マリーの甘美な世界

10月に入り、一気に寒くなると同時に一年も半分が終わってしまった。

葉が色付く中であの今日のメンバーは集の実家であり、竜太郎と巧の居候先である酒蔵 月下を訪れていた。

陸「今年も良い甘酒だな」

赤い茶碗に注がれた甘酒を嗜む。

千歌「ちよつと熱いね、でも凄く甘い」

巧「そりやよかった、ただここ三日俺は甘酒の配布で撮影は出来ないからその詫びも兼ねてジャンジャン飲んでくれ」

善子「こつちもバイトでしばらく巧君と一緒に仕事するからよろしくね」

果南「そういう割には何か飲んでるだけに見えるんだけど……」

アラタ「寧ろこのバイトの理由も甘酒の飲み放題の気も……」

善子「ちよつとお?!私をそんな偏見で見ないでよお!!」

劍崎「まあ、そういう俺たちも本日で甘酒6杯目なんだけどね」

果南「私が言える立場じゃなかった……」

アラタ「好きなだけ頂けるなら頂いてもいいと思うよ」

陸「でもこの後の撮影も胃袋に余裕持つかないとキツくなるからな」

千歌「そもそも今日の撮影って何で私たち居るの？」

劍崎「鞠莉ちゃんとの打ち合わせの時に4人までなら連れてきていいと言われてさ」

陸「その話を聞いて俺が少々強引な手でその杵を手に入れたのさ」

千歌「陸君って何でもねじ込むタイプだね」

果南「私は鞠莉から連絡を受けてアラタ君を誘ったのよ」

アラタ「特に予定も無かったし美味しい物を食べられるならそれでいいですし」

巧「それで、肝心の鞠莉の自宅ってのは？住所も教えてもらってるんだろ？」

劍崎「住所を元にマップを検索したんだけど……」

陸「劍崎、どうかしたか？」

劍崎「ホンドニイツデイイノカ　ワカラナイ　キヨウレツナバシヨダツタ……」

メンバー「えっ……」

甘酒を飲み終えた5人は鞠莉の待つ自宅へと向かった。

移動こそそんなに時間はかからなかったが指定された場所に着いたと同時にスマホの音声案内が終了する。

その場所を見上げれば……

アラタ「冗談じゃないよね……」

果南「そう、ここが正真正銘の鞠莉の自宅よ」

陸「どう見てもホテルじゃねーか!!」

千歌「学校の理事長がまさかホテルまで所有とか……」

剣崎「オハラケハ ナニモノナンダ……」

果南「一応は撮影の許可も撮ってるんだし気にすること無いと思うけど」

陸「高校生が入るには敷居が高すぎる……」

アラタ「とりあえず中に入って撮影始めよう。こんな経験無いんだからさ」

5人は重い足を動かしホテルへと入って行った。

鞠莉「チャオ♡ホテルオハラへようこそ!!」

陸「これ自宅って言っているのか?」

鞠莉「細かい事は気にしないの。左のスイーツ店で例の物を用意してくるからついて来て」

アラタ「オープニングはこれでいいね」

剣崎「早速本題だけどうまく出来るか不安になってきた……」

そして動画の本題に入る。

アラタ「それじゃあ、カンペ提示するからその通りで。カメラは手で固定するから目線を意識して」

劍崎「了解」

陸がカンペでセリフを指示する。

劍崎「それでは、今日はここ、ホテルオハラで来週からお客さんに提供する新作スイーツを頂きたいと思います」

鞠莉「決して損はさせないバリユーの新作スイーツをレビューします。劍崎さんにファンタスティックでシャイニーな感想を是非聞きたいです♪」

果南「明らかに劍崎君緊張してるわね。対して鞠莉はカメラを気にせず寧ろ大きくアピールしてる。劍崎君はこの差をどう埋めてくるのかしら？」

劍崎「では、限定スイーツをお願いします」

劍崎の前に運ばれてきたのは何層にも重なったスイーツだった。

鞠莉「秋限定のマロンクリームのアーモンドミルクフィユとメープルストレートティーセットです」

陸「……」ギョルルルツ!!

千歌（ああ〜陸君食べたがってるね……）

アラタ ヒソヒソ「後で人数分用意してあるから今は耐えろ」

陸はお腹を押さえて耐える事にした。

劍崎「それじゃあ、頂きます」

劍崎はミルフィューユにフォークをさして二つに割って口にした。

劍崎「マロンクリーム其自然な甘さ、生地はサクサクでアーモンドの香ばしい香りが実に惹かれる」

メープルストレートティーを一口飲む。

劍崎「ミルフィューユの甘さとメープルの紅茶はどちらも主張せず、それぞれの良さを感じさせる。ミルフィューユの味をより引き立てているいい組み合わせだ」

鞠莉「喜んでもらえて良かったわ、メープルストレートティーはいくらでも飲めますからぜひ声をかけてください」

劍崎「それじゃあ、この秋のティーセット。お値段はいくらでしょうか？」

鞠莉「こちらはなんと1100円で提供します。是非遊びに来てくださいね。シャイニー☆」

劍崎「以上、ホテルオハラからお送りしました」

アラタはカメラを止めてSDカードを手帳型ケースにしまう。

アラタ「劍崎君、お疲れ様」

劍崎「食レポ初だから大変だった」

陸「あ……ああ……」魂抜けてる

劍崎「鞠莉ちゃん、そろそろ陸が限界だからさっきの奴頼む」

鞠莉「任せて☆」

その後陸はホテルオハラに通い詰めとなり、常連になった。

第17話 ダイヤモンドツインテール

放課後 サーティセブンアイスクリームにて

千歌 「明日から6連休、夢のシルバーク!!」

梨子 「ラブライブ本戦まであと少し、練習も楽曲もバッチリ!!」

陸 「楽しそうで何よりだな」

集 「遊びやラブライブも良いがそもそも二人はテストの結果はどうだったんだ？」

千歌 「総合評価B!!」

梨子 「当然Aだったわ、楽曲と並行して勉強してよかったわ」

集 「それなら安心した、ここに来る前にグループラインでジュンヤがルビイの補修を行っていると聞いたから不安だったんだ」

陸 「それで今はルビイは勉強に追われてるわけだ」

千歌 「B判定で安心した……」

陸 「まあ、シルバークはゆつくりすると良い。ラブライブ本戦も来月だから今の内に好きな事をやるのも大切だぜ」

集 「僕もこれから素材の動画が渡されたら徹夜で編集作業だ。ジュンヤの部屋の編集

部屋で寝泊まりの日々さ」

千歌「あつ、確か今日の撮影当番って……」

千歌「カガリとダイヤが今日のメイン。カメラ担当に竜太郎がついていつてるよ」

集「アクアも大会で本戦出場を決めた事もあつて大いにファンが増えている。動画も定期的に出してるお陰でアクアは全国規模だ。良いパフォーマンスを期待している」

千歌「頑張ろう、梨子ちゃん!!」

梨子「目指すは優勝!!」

陸「期待してるぜ、千歌」

陸は財布から10000円を2枚取り出して二人に渡した。

陸「それでトリプルアイス、好きなの買って来い」

梨子「いいの!!」

千歌「買いに行こうよ!!」

そう言つて二人はアイスを買いに向かった。

黒猫団スタジオ

ルビィ「ズーン」補修全部終わった……」

ジュンヤ「お疲れ様、今からスコーンを焼くけどどうかかな?」

ルビィ「ペア」いただきます!!」

そして忘れてはいけない今回の主役、ダイヤとカガリである。

カガリ「皆さんどうも、黒猫団のカガリと」

ダイヤ「スクールアイドル、アクアの黒澤ダイヤですわ」

カガリ「今日はダイヤちゃんと一緒に街にある猫カフェ、ドリームキャッツにやってきました」

ダイヤ「猫と触れ合える素敵な時間を皆さんにお届けします」

竜太郎「それと撮影担当の竜太郎だ。余り映らないがよろしく頼む」

カガリ「それじゃあ、お店に入るよ」

二人は店内に入ると店の中で6匹の猫が出迎える。

ダイヤ「パアアアア」て……天国……ですわ」

カガリ「1時間プランでお願いします」

店員「1時間1200で3名様なので3600円になります」

竜太郎「俺の足元に1匹甘えて来てる、カメラ固定して触ってみようか」

そして3人は気に入った猫を選んで撮影をする。

ダイヤ「この子、白くてモフモフ……天使ですわ!!」猫「ミヤーン」

カガリ「この子は白と黒が実に可愛い、アクセサリーを付けると映える。後でインスタグラムに投稿しようかな」猫「アオーン」

竜太郎「良いよ、良いよ、凄く良い映像が取れてる」

カガリ「竜太郎君、一枚静止画取れるかな」

竜太郎「勿論だ、カメラ切り替えるよ」

竜太郎がビデオカメラを静止画モードにすると同時にカガリはリボンを取り出して髪を縛る。

白いリボンのピンクツインテールになったカガリは猫を頬に寄せて撮影の合図を送る。

ダイヤ「カガリさんって女装が凄くかわいいですね、一瞬男性である事を忘れてしまいました」

竜太郎「動画を見ていなかったら誰も男だなんて思わないだろうな」

カガリ「インスタグラムで色んな女装の写真上げてるから気になったら見てほしいな」

ダイヤ「今度見てみますわ♪」

カガリ「それじゃあ、最後はチュールをあげてみよう」

二人はチュールを猫に与えると幸せそうにチュールを舐める猫に心が癒されていた。

1時間後

ダイヤ「素晴らしい、体験でしたわ♪」

カガリ「猫好きの視聴者の皆、コメントじゃんじゃん送ってね」

竜太郎「これで本日の動画は以上となります」

ダイヤ・カガリ「どうもありがとうございました!!」

その後

集「撮影お疲れ様、猫カフェは良い癒しになったかな？」

SDカードをカガリから受け取りつつ聞く。

カガリ「ダイヤちゃんも満足してたし、僕たちのインスタグラムの素材も沢山撮れたから今回の撮影は意味があったと思う」

集「それじゃあ、そのインスタグラムはカガリに任せる。僕はこれから編集作業を開始するよ」

カガリ「後で差し入れのポテトとナゲット買って来るよ♪」

集「それはありがたい」

PM6:00 デイスク・ドール・シンフォニクス事務所

心咲「本戦出場を決めた4チーム、現状の投票率はセイントスノーが安定して票を獲得している。君たちは実に素晴らしいよ。鹿角姉妹」

鹿角聖良（かづのせいら）「お褒めの言葉、ありがとうございます」

鹿角理亞（かづのりあ）「我が王、心咲先生の機体に応えられるよう、引き続き精進し

ます」

心咲「期待するとは言いが、正直俺は今の目線は君たちじゃない。君たちと戦うことになるだろうスクールアイドルに大きな関心を持っている」

聖良「私達以外に心咲先生の興味を持つスクールアイドルがいるんですか？」

理亞「私達と戦う事になる程の逸材、何者なの？」

心咲「アクア……彼女たちと出会うなら覚えておくといい」

心咲はそう言つてコンビニのドリップコーヒーのフタを開ける。

理亞「何故、ランキング4位のスクールアイドルに注目するの？」

その言葉に対し心咲は一つのノートを提示する。

心咲「高校生芸能は真の意味での競争社会、君たちがその世界に足を踏み入れるなら無名の逸材に目を向ける事。持つ才能は時としてそれを超える人間がいる。そう、俺のように……ね」

第18話 心咲ファンサービス

昼時の空港内の牛丼屋 吉川屋

陸 ガツガツツ!! 「定員さん、牛丼並盛もう一杯!!」

集 「陸、気持ちが変わるがもう4杯目だぞ」

仁乃介 「相変わらず良く食うよな、言っとくけど飛行機の中で全部吐くなよ」

ジュンヤ 「陸は身体が頑丈だから問題ないよ」

陸 ガツガツツ 「はあく美味かった。これでしばらく持ちそうだ」

集 「大盛り一杯に並盛3杯、僕なら多分胃を壊しているぞ……」

ジュンヤ 「まあ、食べ終わったんだしそろそろ皆を迎えに行こう」

陸 「とは言っても千歌たちすぐ隣のイタリアンの店にいるじゃねえか。時間もあるんだからもうちよつと空港を散策しても良いんじゃないか?」

集 「軽い運動も兼ねて少しふらついても良いかもしれない?僕は賛成だよ」

ジュンヤ 「じゃあ、ルビィちゃんのリインに空港改札口で落ち合おうって伝えとくよ」

仁乃介 「それじゃあ、行きますか」

突然だが何故彼らが空港にいるのか説明する。

数日前

鞠莉「心咲さんの生放送のスタジオチケット、何とか手に入りました〜」

曜「お店を回って手に入ったのは8枚だけど行きたい人、手をあげて」

そう、千歌たちは函館で行われる心咲護の生放送番組を見れるギャラリーのチケットを入手することができた。

最初は皆行きたいため公平にくじ引きで決めた結果が……

何の因果かルビイを含む2年生組がチケットを手にする事になった。

行けなかった面々に沢山のお土産を条件として小原家が旅行代を出してくれたため、俺達は函館を目指して空港にやって来たのだった。

PM13:00

アナウンス「間もなくH360便函館行き の搭乗時間です」

改札口前で缶ジュースを飲みながら待っていると……

千歌「お待ちせー」

梨子「間に合った」

千歌・梨子・曜・ルビイが荷物を抱えて走ってきた。

陸「何だよ、その荷物？」

ルビイ「飛行機の中で千歌ちゃんがお菓子を食べようとして売店で……」

曜「私も食べたい物いくつかを……」

ジュンヤ「折角の旅行だし奮発しても良いと思うけど時間はちゃんと守ってほしいね」

陸「それより早く乗るぞ、外の景色が良く見えるいい席を選んだからな」

千歌「それじゃあ、函館へゴーゴー!!」

キイイイイイイ!!

陸たちが乗った飛行機は函館へと飛び立っていった。

それから約6時間のフライトの中でメンバーは完全に眠ってしまった。

朝5時から空港ではしゃいでいた為、余程疲れていたのだろう。

眠る間に時間は大きく過ぎていった。

P M 1 9 : 0 0

函館に着いた面々は空港近くの予約を入れたホテルで一夜を過ごす。

部屋で陸と集は函館の街を眺めながらドクペを手にしていた。

陸「明日から面白い物が見れそうだな」

集「考えるだけでゾクゾクするねえ、この街で退屈するような事はなさそうだ」

陸（明日、千歌と二人で函館を巡れたらどんなに幸せなんだろうな……）

翌朝

バスで生放送のスタジオがあるテレビ局に向かい、会場に着いた陸たちは席に座っていた。その頃千歌は……

千歌「陸君さつき眠そうだったからついでにブラックコーヒー買って行こう」
チャリン

スタジオ内の自販機でジュースを買おうとするが……

ピッ!!

千歌「あれ?出てこない」

ピッ ガタンツ!!

千歌「え……嘘でしょ……」

恐る恐る取り出し口を見ればブラックの缶コーヒーが2つ出てきた。

千歌「うわあああああ!!失敗したあああ!!」

本来ならオレンジジュースを買うはずが千歌の飲めないコーヒーが二つ出てきてシヨックを受ける。

千歌「どうしよう……」

すると左の通路から思いよらない事が起こる。

ガチャ

千歌「な……心咲……さん」

生放送前の心咲が自分の隣でジュースを買おうとしていたが……

心咲「あくブラックコーヒー売り切れ、ちよつと痛いなあ」

その時千歌は手に持った二つのブラックコーヒーを見て心咲に声をかけた。

千歌「あの!!」

心咲「ん?」

千歌「ブラックコーヒー間違えて買ってしまっただけですけど、良ければこれ、あげます」

心咲「いいのかい?」

千歌「はい!!」

心咲は財布から130円を取り出して千歌に渡すと缶コーヒーを受け取った。

心咲「ありがとう、それと思ったんだけど、スクールアイドルのアクアでセンターを務めたよね。君」

千歌「知ってるんですか!!」

心咲「ベスト4に上がって来たし、何よりアクアは前から注目してたからね」

千歌「私達を心咲さんが!!」

心咲「そのことについては今日の生放送で話すつもりでいる、それに君は……」

心咲は缶のタブを開ける。

心咲「俺の大事な人に似ているからね。高海千歌さん」

千歌「わ、私の名前……」

心咲はコーヒーを飲み干すと缶を捨てて、自販機の前を後にした。

自分の名前を呼ばれて驚きを隠せない千歌はただジュースを持ってスタジオに向かった。

千歌「陸君、眠いならコーヒー飲む？」

そう言つて千歌は陸にコーヒーを渡す。

陸「ありがとう、助かる」

MC「それでは、始めましょう。ラブライブ・スポットライト。まもなくオンエア開始です!! それでは今回のナビゲーターを務めるあの人を呼びましょう。心咲護さん。どうぞ……!!」

その言葉と同時に中心の扉が開き、心咲が現れる。

心咲「皆さん、こんにちは。今回のラブライブのナビゲーターを務めます。心咲護です」

心咲は用意された豪華絢爛な椅子に座る。

MC「それでは、今回のテーマは本戦に向けて心咲さんには3つの質問に答えてもらいます。まずは最初の質問として本戦は投票率による4組対抗戦となりますが心咲さ

んがプロデュースしたセイントスノーに絶対の自信はありますか？」

心咲「100%とは言わないですね。そもそも最初に決着が決まっている様な勝負は無いし、世の中は勝ちを確信した時点でそれはもう3流ですよ。でも敢えて勝てない勝負と分かっていてもそれに挑む者こそ、真の勝者と言えますね」

MC「流石は心咲さんです。それでは次に今年のラブライブで気になっているチームはありますか？」

心咲「浦の星女学院のアクアに興味があります」

陸たちメンバー「!!」

MC「何故ランキング4位のアクアを……」

心咲「予選前からリストに載っていた無名の学校のスクールアイドル。今年のチームもかつての強豪校の集っている中でアクアだけが俺も存在を知らなかった学校の出身だったから。そしてその学校は今廃校の危機にさらされている。そんな中でのアクアの出場に自分も同じものを感じていた。特にアクアのリーダーである高海千歌は自分の大事な人と似ているからね」

会場は驚きを隠せず、千歌たちも呼吸が止まりそうになった。心咲護が興味を示しているのが自分たちである事に……

MC「心咲さんは確か既婚者ですよ。もしかして大事な人と言うのは……」

心咲「妻の、高坂穂乃果です」

千歌「ええっ!!心咲さんって穂乃果ちゃんと結婚してたの」

梨子「何、知らなかったの?」

曜「しかも2児の父です」

千歌「もつと詳しく調べておくべきだった……」

MC「それでは最後の質問です。今大会で心咲さんが掲げるテーマは何でしょうか?」

すると心咲は椅子を立ち、一呼吸すると意を決して語った。

心咲「多くの夢を持ち、このステージに立つアイドルたち。俺はこの戦いの舞台の中で輝きを放つ彼女たちを天使と讃える。この時代に新たな歴史を作る少女たちをステージの王である心咲護が祝福しよう。天使たちの宴の時間。テーマは、エンジェルパーティータイム!!それが俺の掲げる理想だ!!」

その言葉に歓声が上がリ、陸たちは感極まっていた。

第19話 一つだけの約束

以前の函館遠征から一夜明けて

果南「チーズケーキ待ってた!!しかもちゃんと指示通りに買ってきてくれるなんて!!」

鞠莉「バタークッキーもインスタグラムで人気のスペシャルパッケージ!!」

ダイヤ「ミルクプリンも私が食べたかったものですわ!!本当に無茶な注文に応えてくれた2年生組に感謝しますわ!!」

陸「とりあえず土産については梨子と集の二人に任せておいて正解だったな」

梨子「お菓子屋さん沢山巡って買ってきたから凄く歩いたよね」

集「マップや路線図に関してなら僕が一番詳しいからね。希望を叶えることが出来て良かった」

アラタ「黒猫団メンバーは全会一致でカニとホタテとせんべいとスモークサーモンにクマ印のサイダーを頼んだ。勿論皆で分ける事前前提になる他スモークサーモンはジュンヤが今焼いてくれているよ」

果南「もしかしてこのお菓子が複数箱あるのって……」

陸「一人1個ずつだよ」

3年生「ええええええ!!き、聞いてなーい!!」

陸「そう言えば今日は千歌がまだ来てないな、あいつどうしたんだ?」

集「言っておくが今は結構デリケートだと思うぞ。それより3年生の皆気絶してるから運ぶの手伝ってほしい」

陸「あの時の事、気にしてたのか?」

梨子「あまり考えない方が良いと思うよ、私だってあの言葉は引つ掛るんだから」

陸は疑問を残したまま3年生を和室へと運んでいった。

一方千歌はサーティセブンアイスクリームの店舗前にいた。トリプルポップのアイスを手にして……

千歌「私は、何のためにスクールアイドルやってるんだろう……」

それは函館の生放送後、心咲に指名されて呼ばれた時にその現場にはセイントスノーの二人が待っていた。

そこで二人に突きつけられたのは……

千歌「セイントスノーの聖良さんと理亞さんがなんで私を……」

理亞「少しあなたに確かめたい事があるの」

聖良「回答次第ではあなたを敵とみなしますがよろしいですか?」

千歌は息を飲み、目の前にいるセイントスノーと心咲に目を向ける。

理亞「教えて、あなたがラブライブに出た理由、その本心は大切な学校か？」

聖良「それともステージへの純粋な憧れか？」

心咲「君のスクールアイドルへの本質はどっちか、聞かせてもらおう」

千歌は意を決して答えた、その選択は……

千歌「学校の為、それが私の……」

理亞「バカなの？あなた」

千歌「え……」

聖良「三流と言えがいいのでしょうか？その私情でアイドルを名乗るなら、私は失望しました」

理亞「心咲先生の栄光の贖物、あなたにはそれがお似合いよ。そんな理由で出てるなら本気でラブライブを甘く見てる。ラブライブは遊びじゃないのよ!!これは真の意味での高校生芸能の生存競争、あなたはその戦いでそんなくだらない私情でアイドルやってるならその時点で負けてるのよ!!」

千歌「高校生芸能……」

心咲「今の時代のラブライブのほとんどは高校生芸能の登竜門だ。皆芸能界を目指している。でも、高海さん。その中で自分の目指す理由がそれなら、君の思うようにやれ

ばいい。応援するよ」

理亞「本戦で会いましょう、徹底的に叩き潰してあげるから。待つてなさい、三流」
千歌はこの出来事から自分のアイドルとしての大きな理由について悩んでいた。

拳句三流の名前で呼ばれる事になり、自分のやって来たアイドルの意味を完全に否定されたのだから。

千歌「心咲さんの栄光、ミュージズの贖物……結局、同じ理由でも私は……」

陸「ここにいたのか」

千歌「陸君、あつ時間忘れてた!!すぐに行くね!!」

陸「いや、今日は遅れるって伝えておいた」

千歌「え……」

陸「ちよつと付き合えよ、話したい事があるんだ」

そう言つて陸は千歌の手を握つて街を出た。

海岸沿いの公園

千歌「急にどうしたの?」

陸「梨子から聞いたんだ、セイントスノーの事」

千歌「!!」

陸「アイドルとして、認められなかったんだよな……」

千歌「ごめん、私……何のためにスクールアイドルやってるんだらうって、でも自分が……分からなくて……」

かすれた声で話す千歌に陸は肩を寄せる。

陸「千歌、その気持ち……凄く分かる」

千歌「陸君、私……何のためにアイドルを……やればいいの……」

陸は自分が伝えるべき言葉を千歌の涙に触れて伝えた。

陸「学校を救いたい気持ちは分かる、でもそのせいで千歌は本当に楽しいって気持ちでアイドルをやれてない。千歌、俺は千歌のアイドルとして本気で楽しんで歌ってる姿が見たいんだ。次の本戦は学校の為じゃなくて、千歌自身の為に歌ってくれ!!」

千歌「私の……為に……」

陸「俺も全力で応援する、そして自分の為に歌えば、きつと学校も救える。縛られる必要なんてないんだ。自分を信じて、そこにきつと……意味がある!!」

千歌「ありがとう、陸君。私は私自身の為に歌う。陸君が応援してくれるならそれに応えて、私が一番だって実感したい」

陸「頑張れよ、俺もどこまででもついていくから」

千歌「次の本戦で、セイントスノーに私のアイドルの意味を伝える。そして優勝する」

陸「ああ、それと千歌に伝えたい事、その先にあるんだ」

千歌「何？」

陸「千歌、本戦が終わったら、何かやりたい事、あるかな？」

千歌「私の、やりたい事？」

陸「俺も付き合おうから、やりたい事を何でも言ってくれ」

千歌はその言葉に息を飲んで少し考えた後、陸に伝えた。

千歌「本戦後のクリスマス、私の家に泊りに来てほしいな……」

第20話 天使の世界

ラブライブ本戦 会場

千歌「大丈夫、今の私なら……」

本番30分前に千歌はどうしてもセイントスノーに自分の答えを伝えたかった。

千歌は出場者用のフリースペースでセイントスノーの二人を待つ。

そしてその時は訪れた。

理亞「私達を呼び出すなんて、三流が負けでも認めたのかしら？」

千歌は鋭い視線でセイントスノーに宣言した。

千歌「私達は確かに三流かもしれない、でも、以前の考えは全部捨てたよ」

聖良「それは、私たちに勝てないと思って逃げるためですか？」

千歌「違う、今の私のアイドルとしての理由は……私自身が輝くために歌う事。それが今の私の意味だから」

セイントスノーは鋭い視線で千歌を見つめると静かに呟いた。

理亞「三流から少しマシになったみたいね。簡単に潰そうと思ったけどそうはいかないと思つた」

聖良「自分の為にアイドルをやる。その心は認めましょう。でも、勝つのはセイントスノーであることは変わりませんが……」

すると聖良は手を伸ばして千歌に言葉を掛けた。

聖良「形勢逆転を、期待します」

千歌は聖良の手を握り、互いを見つめ合った。

理亞「そろそろ、私たちのライブの時間よ」

聖良「行きましよう、私たちのステージへ」

聖良・理亞「全ては心咲先生の理想の為に……」

ホール内 観客席 天井ホール

ジュンヤ「これから優勝候補のセイントスノーのライブか」

カガリ「乗り越えるべき彼女たちの演技をよく見ておかないと」

陸（千歌……）

そして始まるセイントスノーのライブ。一方でホールの特設ステージでは……

???「なあ、心咲。今回のセイントスノーの楽曲提供したのお前だろ。何で嬉しそうに

しないんだ？」

ソニッカードのベース担当、桐島歳（きりしまみつぎ）

???「心咲先輩はこういうの無言で見るのが普通なんですよ。きっと自分の与えた演技

はしつかり見るタイプなんですよ」

ソニッカーズのドラム担当西条智樹（さいじょうともき）

心咲「……」

心咲は言葉を発さずにヘッドホンに指を弾きながら映像を凝視した。

ステージにセイントスノーが立つと同時にエレクトロソングが鳴る。

歓声が変わるステージでスタイリッシュなダンスと歌詞が響き、さながら近未来的なライトの光が二人を照らす。

そのパフォーマンスの全ては心咲自身が手掛けただけあってアイドルと言う枠の広さを観客に見せつけた。誰もが感じるその感覚は……

新時代そのものだった。

セイントスノーのライブ終了後、その实力を見せつけられたアクアは身体が震えかけるが彼女の言葉でそれを止めた。

千歌「怖いのはわかる。でも、ここからが私たちの本当の闘い……必ず、成功させよう!!」

お互い覚悟を決めて、ライブの準備を始めた。

カンカンツ!!

千歌「えっ、誰？」

扉を開けるとそこには二人のスクールアイドルが立っていた。千歌はこの人を覚えていた。

千歌「貴方はセイントスノー前のライブの……」

「千歌ちゃんですよ？少し、話せませんか？」

「きつと、あなたの力になれると思います」

二人の言葉を聞いて、千歌は話を聞くことにした。

「それじゃあ、改めて、私は竜ヶ池高校アイドル部のシンフォニクス候補生、坂倉

レイ」

「最王学園のアイドル部、シンフォニクス候補生の香野 翠（かのみどり）です」

千歌「それで、話というのは……」

レイ「セイントスノーの事で落ち込んでないかなって思ってた」

千歌「確かに、でも私はそこまで……」

翠「自分の為に歌う、あなたの意味は正しい」

千歌「えっ……」

レイ「セイントスノーが目指した物をあなたが追いかけることは無い、私だつてここまで来るのに案外苦労したんだよ。そしてようやく私も自分の意味を見つけた。千歌ちゃんも見つけたアイドルの意味を大切にすべきだよ」

翠「私も、千歌さんが今ここにいるように私にもここに意味を見出してステージに立った。セイントスノーが目指すアイドルは私と違う。純粹に自分の為に歌う、シンブルだけど誰にも負けない強い、自分だけの想い。その真つ直ぐさに心を打たれました」

レイ「千歌ちゃん、今から始まるライブ。自分が思うようにやってみなよ。応援する」

翠「私も千歌さん信じます。セイントスノーを超えるような素晴らしいライブを期待します」

レイ・翠「頑張つて、千歌ちゃん!!」

千歌「レイちゃん、翠ちゃん、ありがとう!!」

二人の理解者が背中を後押しして、千歌は本当の意味で前に進む決意をした。

そんな様子を現場に居合わせた心咲は満足気な顔でその場を後にする。

心咲（ラブライブにおいて最も大事な物。その多くは共に夢を追う仲間が支え合い、そして一つの答えと意味を手にすること。俺はその世界で意味を探す少女たちを導く事が出来れば良いと考え、赤峰社長と共にディスク・ドール・シンフォニクスを立ち上げた。夢を追う高校生たちの王として、俺がそれを指導して見届ける。これまでのラブライブで誰も勝てなかったセイントスノーを超える逸材、人々は新たな女神を求めてる。アクア、果たして君たちは新たな時代にふさわしい、伝説となれるかな?）

心咲はその言葉と同時にヘッドホンを頭に被り、ソファアに腰をかけた。

心咲「見せてもらうか、アクアの出したアイドルの意味を」
そしてアクアのステージが始まった。

サイリウムが点灯し、ステージは静かに光を帯び始める。

黒猫団も息を飲み、その光と同時にアクアはその姿を現した。

歓声は大きく広がり、アクアのミュージックが流れ始める。

千歌「これが、私たちのライブ!!」

その言葉と同時にアクアによるパフォーマンスが始まった。

スカートがなびき、あざとさやドキツとするようなアイドルのしぐさと歌のフレーズはアクアらしい可愛さを強調したものだだった。

それぞれに色があるようにライトもメンバーにスポットが当たる度にそれに合わせ
た色が輝く。

千歌（わかってきた、感じる。今のこの瞬間を楽しんで、アイドルとして多くのファ
ンの前で、歌ってる。これが、スクールアイドルの楽しさなんだ!!）

観客席

カガリ「陸、嬉しそうな顔をしてるね」

陸「魅せてくれるな、あれが本当の……アイドルとしての千歌か」

仁乃介は大漁旗を大きく広げる。

仁乃介「ここから大一番だぞ!!」

ラストのパートに入ると会場全体のボルテージが最高潮になる。

それに応えるかのように最後のパートを綺麗に歌い上げる。

静かに曲が終わりを告げ、アクアはマイクを握り締めて会場全体に伝えた。

アクア「皆、ありがとうー!!」

ワアアア!!

最後の言葉を感じで締めくくり、アクアのライブは幕を下ろした。

その後、観客による投票タイムの最中、陸は投票を終えてその場を立ち去ろうとした時にあの人物が声をかける。

心咲「黒猫団の、海道陸さんだね」

陸「し、心咲……護……さん」

心咲「動画を見させてもらった、アクアをここまで宣伝していて、実に面白い動画を作ってくれる。興味深いと思ったよ。特にカメラのセンスは実に素晴らしい」

陸「ありがとうございます、動画を見てくれるとは、何て言ったらいいか……」

心咲「それで、君に一つ提案がある」

陸「提案?」

心咲「ディスク・ドール・シンフォニクスで、芸能写真の仕事をやってみないか？」
陸「お、俺が、ディスク・ドール・シンフォニクスの……」

心咲「いくらでも考えていい、答えが決まったら、ここに連絡してくれ。待ってる」
心咲はメモを渡して、仕事に戻った。

そして……

アナウンサー「これより、投票結果発表と優勝式を行います」

全体が静まり返ったと同時に会場は緊張感が漂っていた。

アナウンサー「今期ライブ本戦、投票結果は……」

多くの苦難の先に待っていた、望んでいた真実とは……

第21話 冬休みの喧騒とありふれた日常

12月 冬休み

コンビニ モーソン前

陸「……」ジュルルルツ!!

唐揚げと山のように袋に入った肉まん。

仲間の買い物を終えた陸はタピオカミルクティーを啜りつつスマホを見る。

陸「千歌たち、優勝したんだ……あの大舞台で……」

今年のラブライブはセントスノーを破り、アクアが優勝した。

望んでいた勝利を手にしてそれ以降廃校阻止も決定したほど入学希望者も多く増えた。

陸は当然今も舞い上がっており、何かとニヤニヤしていた。

陸「さて……」

タピオカミルクティーのカップを捨てると陸はエコバッグを抱えてその場を後にした。

黒猫団スタジオ ジュンヤの家

陸「ただいまー」

カガリ「お帰り、カスタードまん買ってきた？」

陸「言われたのはちゃんと買ってきた」

陸はつゆだくのおでんの箱を開けて割りばしを割る。

竜太郎「いやー寒いなー、ホリガナココアが染みるぜー」

アラタ「カツプスープはコーンクリームだな」

劍崎「俺の頼んだエビクリームスープもバツチリだ」

アラタ・劍崎「そしてお決まりのこんがりトースト!!」チーン

アラタ「焼けたみたいだ、早く作ろう」

劍崎「先にお湯入れるぞ」

仁乃介「集、しらたき貰っていいか」

集「それならゴボウ巻きをこちらにくれるか？」

ジュンヤ「仲が良さそうで何よりだね」

ジュンヤはがんもどきを齧るとおでんのつゆを少し飲む。

巧「やつぱこれだなあ」

陸「巧が持ち込んだ甘酒まだあったのか？」

ジュンヤ「スタジオにビン入りの甘酒3本持ち込んだからね。僕もよく飲んでる」

仁乃介「後で一杯もらうか、身体に良いしさ」

集「それにしても、こつちも甘い汁をいくらでも啜れる。アクアが優勝して以降、ツイッターやアクアの活動記録のアクセス数が15万を超えた。今年のプロローランキングも上位独占の最高潮だ」

カガリ「悔いを残さない、良いライブだったよね♪」

ジュンヤ「因みに優勝パーティーはクリスマスに行く予定だ。腕によりをかけるから期待しててほしい」

陸「ああ、ごめん。クリスマススの予定の事なんだけど……」

アラタ「何か不都合でも？」

陸は一瞬口ごもるが勇気をもって口を開いた。

陸「クリスマスス……千歌の家に一晩世話になる事になったんだ」

ピシヤアツ!!

メンバーに電撃が走り、余りにも信じられない顔で周りが静まり返った。そして……アラタ「ど、どど、どという事!!」

カガリ「それってつまりは千歌ちゃんの一つ屋根の下!!」

竜太郎「いくら何でもそんな甘い話あるのかよ!!」ガクガクガクガク!!
胸ぐらをつかんで陸を振り回す竜太郎。

陸「おおお、落ち着け竜太郎、あばばば!!」

仁乃介「陸にとつて一番幸せな事じゃないか」

集「ぼ、僕は何も聞かなかつた。聞かなかつたぞ」ヴヴヴヴヴツ!!

スマホのロック画面を連打する集。

ジュンヤ「皆、とうとう壊れ始めたみたいだ。どうしよう……」

恐らく今年のクリスマスで恵まれてるのは陸だとジュンヤは思うと陸にサムズアップした。

一方でアクアの方も……

皆「ニヤニヤニヤニヤニヤニヤ」

千歌「皆、そんなに微笑ましいのかな……」

果南「好きだったんでしょ、陸君の事」

千歌「確かに、好きだけど……陸君は違うみたいで……」

ダイヤ「ああいう男の子は恋愛意識を表に出そうとはしないんですよ」

善子「今宵、聖なる夜に一つの愛の儀式が……」

花丸「思いっきり身体で迫っても許されるから早くリア充降臨させるぞら!!」

千歌「陸君に、身体で……」

梨子「破廉恥すぎるよ!!」

曜「出来れば、ある程度節度は守ってね」

鞠莉「凄く面白い事になりそうデスね〜」

ルビィ「何か怖い物を感じるよ……」

千歌「とりあえず、陸君と私の家でクリスマスパーティーもする予定だから皆の言う黒猫団のパーティーは参加できないんだ。ごめんね、せつかく誘ってくれたのに」

果南「いいのよ、クリスマスを好きな人と過ごせる事ほど幸せなんてないんだから」

曜「陸君と幸せな時をゆっくり過ごし☆して☆」

千歌「皆、ありがとう!!」

鞠莉「その代わり後日ジュンヤさんの家で紅茶を飲みながら何があつたのか全部話してもらいますから」

果南「やめなさい」

千歌は皆に支えられつつ、陸との関係を深めようと決心するのだった。

そして翌日 ファッション専門店

ジュンヤ「千歌ちゃんの家泊る以上、既存の服は新鮮さが無い」

仁乃介「そこで陸の為に新しい冬服を買う」

陸「あのさ、お金とかって……」

ジュンヤ「僕が出す、問題ない」

曜「陸君が来るのであれば服は新調する事、乙女の一つの鉄則」

鞠莉「千歌ちゃんの為に良い服を揃えてる店に話を通しておきました」

千歌「お金とかは……」

鞠莉「全部マリーが負担します、安心してチョイスしてね」

と言う訳でこの二人に連れられてお泊り前の服を選ぶことになりました。

皆下心丸見えだったのはさておき、陸と千歌は服を何着か購入して二人にお昼ご飯を奢ってもらいつつ下準備は終了した。

陸「よし」

荷物を纏めると陸は冷蔵庫からドクペを取り出して飲み干した。

第22話 少しでも君に近付けたら……

クリスマス 当日

デパートのケーキ屋さんにて……

陸「並んでもう1時間40分、流星は人気店。かなり並ぶな……」

メツセンジャーバッグを背負い、ケーキ屋に並ぶ陸は前回話した通り、千歌の家に泊りに行く途中である。

朝10時に家を出てかれこれ1時間はずっとケーキ屋の前で立ち往生していた。

陸「デパートのケーキさんは間違いだったか、でも今更店変えるわけには……」
時計の針が12時を指す頃、ようやく陸にタイミングが回ってきた。

陸「よし、予定通り。ショートケーキもちゃんと買えた!!」

陸はケーキの箱を受け取り、1200円を支払ってデパートを後にした。

陸「すっかり昼になっちまったな。この際だし近くのピザ屋で済ませるか」

陸はピザ屋に入るとモッツアレラオリーブのピザとオニオンリングを注文した。
ピザを食しつつ、千歌にラインを入れる。

陸「だいぶ遅くなった……」

午前の間はケーキの購入で終わる事となった。

千歌の自宅 十千万

千歌「まだかなあ……」

ラインの既読があるものの千歌にとって何より嬉しいのはここに陸が来る事。その為に自分の部屋に陸の為の布団を用意したことだった。

と言うより今の千歌はにやけ顔が止まらなくなっている。

千歌「今夜陸君にナニをしようかなあ、あんな事やこんな事を……」

下心が全開になっているのはさておき隣の梨子の自宅では……

梨子の自宅

善子「何でよりによってクリスマスにこんな盗撮じみた事を……」

巧「鞠莉先輩が二人の様子をカメラに収めろって冗談じゃないだろ」

梨子「今頃皆楽しいだろうなあ」(; ω ;)

集「じゃんけんで負けたのが僕たちとはついてなかったね」

そう言つて集はカメラをセットしてマイクを繋げた。

集「いつでもOKだ、良く見える」

午後1時

陸「失礼します」

??? 「ようこそ、お待ちしました。陸君♡」

高海志満（たかみ しま）千歌のお姉さん。

陸 「志満姉ちゃん、一年ぶりですね」

志満 「陸君も大分変わったね、大人びてる」

陸 「いえ、そんなことないです。未だにただヤンチャやってるガキですから……」

??? 「おお、十千万防衛隊隊員一号!!よく帰ってきた」

高海美渡（たかみ みと）2番目のお姉さん。

陸 「懐かしいな、その呼び方」

美渡 「いい男になったじゃん、相変わらずドクペは好き?」

陸 「今晚飲むなら付き合いますよ、隊長」

美渡 「よっしゃー!」

千歌 「ちよつと待って!!」

陸 「ああ……」

陸は千歌を怒らせたと思い、顔が青くなる。すると千歌は……

むぎゅっ!!

陸 「!!」

身体を密着させて千歌は視線を陸に向ける。

千歌「付き合うのはこっちでしょ。何のために呼んだか分かってる？」

陸「い、ごめん……」

志満「あら、陸君は千歌ちゃんのお気に入りかしら？」

美渡「若いつていいわね、見ていて面白い」

陸「す、すみません。俺そう言うのじゃないんで。あとこれ、デパートのショートケー

キです。良かったら食後に……」

志満「ありがとう、今晩はクリスマスだから頑張っちゃうわよ」

美渡「それじゃあ、お二人とも幸せな時間を。部屋は千歌と同室だからよろしく」

陸「えッ!!俺千歌と一緒にの部屋なのか!!」

千歌「付き合うって言ったの陸君でしょ。今日は私と二人だけで色々な事やつてもら
うから」

陸「わかってるけど、部屋で何をするんだ」

千歌は最初陸につけたオーダーは……

千歌「陸君の膝の上に私を乗せて頭を撫でてほしい」

陸 ピシヤア！（「甘えモード全開!!」）

陸は頭がショートしかける。しかし千歌の要望は必ず応えねばならない。

陸「わかったよ、千歌がそれを望んでるなら……」

千歌「来て、私の部屋を案内するから」

陸を引つ張っていく千歌は何やら嬉しそうだつた。

千歌の部屋

千歌「えへへ」ニコニコ

陸「千歌を撫でるので何気に初めてなような……」

千歌「何言ってるの、中学時代に私の胸にダイブしたのに」

陸「その話掘り返すのやめろよ」

千歌「今ならいいよ」

陸「は？」

すると突然千歌は陸を押し倒す。

陸「どういうつもりだよ!!」

千歌「今の方が中学の時より大きいと思うよ。触ってみる？」

服のボタンを外し、胸の谷間を大きく見せる。すると突然……

美渡「二人とも、ご飯できたよー」

千歌・陸「はひッ!!」

美渡「お楽しみだったみたいねえ」

陸「違う、こ、これは……」

美渡「大丈夫、今の内にこの後継者作るのも良いと思うから」

千歌・陸「忘れてー！ー！！」

そして夕食へ

陸「ガツガツ」「うめエ、流石は旅館の夕食だ!!」

美渡「昔から陸はよく食べるよね」

志満「おかわりも沢山あるから好きなだけ食べてね」

陸「それじゃあ、白米もう一杯いいですか？」

千歌「……」（何であんなことしたのかな……）

夕食後

陸「1年ぶりの旅館の風呂、この温泉の香りも懐かしく思えるな」

ボディソープで身体を洗い流し、シャンプーで頭を洗って湯船の方に振り向くと……

千歌「洗い終わった？」

陸「なっつ!!何で千歌が男湯にいるんだよ!!」

千歌「今日は利用者誰もいないから大丈夫」

陸「でも、一緒に入るのは問題だろ。第一女子高生でアイドルと一つ屋根の下も十分

ヤバイし」

千歌「入ろうよ、言う事聞いてくれんだよね？」

陸はこの言葉が刺さり、二人で湯に浸る事となった。そんな中、陸は千歌に尋ねる。

陸「なんかさ、今日の千歌……大胆に見えるな」

千歌「私でも同じこと思ってた、私でもやってる事、自覚無いんだ」

陸「じゃあ、押し倒したのは……」

バシヤア!!

陸「うわ!!」

突然お湯をかけられた。千歌は不機嫌そうに陸を指摘する。

千歌「陸君って何にも気付いてないんだ。ここまでしてるのに何で察せないのよ」

陸「一体何の……」

千歌は陸に迫り、身体を抱く。

千歌「私はね、陸君が他の誰かに取られるのが嫌なの。陸君は私だけをただ見ている

ほしただけだから……」

陸「千歌……」

千歌の本心を聞くと陸は少しためらいつつ、こう答えた。

陸「俺なんかが、千歌の……」

千歌「見て、陸君!!」

陸が振り向く外には……

陸「雪か……」

夜の景色に雪が降り始めた。

千歌「明日、雪が積もったら、一緒に遊びたいな……」

陸「それもそうだな」

陸は外を眺めつつ千歌の手を握り締めた。

陸（もし俺が千歌と付き合ったら、俺は……支える事が出来るのか？）

一方隣の梨子の家

集「まさか、俺達の為にチキンとケーキを差し入れてくれるとは。千歌の姉さんに感謝だな」

巧「映像取れたし、そろそろ戻るか」

梨・善子「その映像はこのごちそうの対価だけだね」

第23話 終わりの近づく今の関係

1月1日 正月

酒蔵 月下

アクア「新年、明けましておめでどうございます!!」

黒猫団「待ってたぞ!!皆!!」

ジュンヤ「おめでどう!、今餅をつき始めた所だよ」

巧「とりあえず、おせちと刺身類や肉類が用意してあるのと後で雑煮も作るから先に大広間に行つて待つてくれ。ジュースもいくらでも用意してあるからな」

アクア「ごちそうになりまーす!!」

そして大広間にて……

全員「カンパイ!!」カーン!

花丸「エビの天ぷら美味しいぞら」

果南「豪快な鯛の活け造り、写真撮つところ」

皆が食事を楽しみ、語り合う中で唯一クリスマス的一件事で顔を合わせられない二人がいた。

陸（ヤバイ、千歌に話しかけられない……クリスマス的一件事が尾を引いてるぜ……）

千歌（陸君何で顔合わせしてくれないんだろう？もしかして、やりすぎた!!嫌われてないよね？クリスマス的一件事まさか逆効果だったり……）

果南「それにしてもびつくりだよー、千歌ちゃんが陸君を部屋に入れるなんてさー」

陸「ゴフウ!!」

千歌 Σ（?ロ?ー）ガーン（何でその話を!!）

鞠莉「特にバスルームで二人で湯船に浸かったのは刺激的デスね〜」

ルビィ「ピギィィィィィィ!!」

ジュンヤ「ルビィちゃん、大丈夫!!」

陸（（;。D。））ガクガクブルブル（どこである一件事の話を知ったんだ）

善子「まあ、良い映像撮れてよかったけど、おかげで私たちはクリスマスパーティー

出来なかったわね」

カガリ「鞠莉ちゃんが急に二人の様子を撮影してきてなんて言わなければね」

ダイヤ「盗撮は余りしない方が良いですが……」

陸「それなら何で止めなかったんだよ!!」

集「やる代わりに、クリスマスプレゼントでハリケーンニンジャの限定版を鞠莉に

買ってもらったから後には引けなかったんだよ」

ジュンヤ「もうこの話題はやめようか、余り面白半分で語る話じゃないからね」

巧「それよりも、そろそろこれからの事を考えた方が良くないかもしれない」

善子「これからの事？」

巧「3年生の卒業した後の黒猫団とアクアの事」

千歌「あ、そっか……今ここにいる3年生、皆いなくなっちゃうんだ」

仁乃介「その時俺たちは考えて5人態勢、アクアは6人態勢となるわけだな」

花丸「これからは、マルたちが引つ張って行かなきゃならないぞら」

ルビィ「出来るのかな……」

陸は弱気になる二人を見て、声をかける。

陸「やるしかないんだよ、俺だってこうなる事は覚悟してたんだよ」

果南「いなくなる訳じゃ無いし、今後も皆と集まれるから大丈夫だよ」

剣崎「俺たちも黒猫団のメンバーとして出来る限りの動画出演に参加するぜ」

ジュンヤ「ありがとう、僕も不安が少し解けた」

梨子「これからも活動出来ると思うと何か不安飛んでちゃった♪」

竜太郎「それより、皆は大学どこの学部に行くんだ？」

鞠莉「教育学部で理事長としての勉強をする予定」

剣崎「オリンピックの剣道選手目指して修業するぜ」

ダイヤ「ファッションデザイナー学部に進学しますわ♪」

カガリ「喫茶店を開くために調理学部に進学予定」

果南「ダイビングショップ継ぐために水中アクティビティ学部」

アラタ「ディスク・ドール・シンフォニクス目指してダンサー講習を受けるんだ」

陸「ディスク・ドール・シンフォニクス!!」

アラタ「陸、どうかした？」

陸「ああ、実は黙ってた事あって……」

全員「??」

陸「俺さ、心咲護からディスク・ドール・シンフォニクスの出してる雑誌のカメラマンとしてオフアーされたんだ」

ダイヤ「何ですって!!」

ルビィ「心咲さんから直々に」

陸「それで俺、そのオフアーを受けようと思ったんだ。もしかしたら自分のカメラのセンスが芸能界で大きな力になるかもしれない。その道に進んでみようと思うんだ」

千歌「それって、陸君はディスク・ドール・シンフォニクスの所属になるって事？」

陸「恐らく、黒猫団としての活動は完全に無くなる訳じゃないけど出せる動画は今以上に限られると思う」

すると陸は全員に頭を下げた。

陸「本当にごめん、しばらくは東京に行ったまま、いつ帰って来るかもわからないけど……どうか……」

仁乃介「やればいいじゃねえか、陸がそう望んでるなら俺たちはいつまでも待つてるぜ」

梨子「陸君が本当にやりたい事なら、やればいいと思う。私は応援してるよ」

陸「皆……」

ガッ!!

陸「!!」

突然千歌が陸の腕を掴む、千歌は目を鋭くして陸に伝えた。

千歌「陸君が行くなら、私も一緒に行く!!陸君の近くで、力になりたい」

陸は千歌の言葉を聞くと頭を抱えて返す。

陸「俺なんかと一緒にいても苦労するだけだぞ、それでいいのか?」

千歌「全然、陸君の為に尽くすって決めたから」

陸「うっ!!」

周りから黒い笑顔がこちらに向かっている。

陸「お前ら……」

千歌「気にしなくていいよ、本心だから」

陸「これでいいのか……」

その後陸は巧の作ったお雑煮を無我夢中で爆食したらしい。
周りの視線を浴びる中で……

第24話 レンズの先の本音

冬休みが終わり、皆が学校にため息をつきながら通う頃。

陸は海沿いにカメラを向けていた。

今日は天気予報で晴天であり、富士山が綺麗に見える日でもある。

陸「良いシチュエーションだ」

陸はすぐにシャッターを切ると、写真のアルバムを確認する。

陸「後で千歌に渡してやるか……」

そしてふと気づく。

陸「何で今……千歌に渡そうって考えたんだ」

渡す相手ならいくらでもいるはず、なのに何故千歌なのか。

陸は無意識に千歌の名前を頭に浮かんだ事に謎を感じる。

陸「ダメだな、迷惑かける未来しか見えない」

千歌と付き合ったら自分が千歌に迷惑をかけてしまう、それは分かっていた。

でも陸の中では安心できる言葉があった。

陸「力になりたい、か……」

若干それを信じるべきだと思う。

千歌が自分を支えてくれると考えると自分はまだ臆病になってるだけだと感じていた。

陸「そろそろ、決めなきやならない。俺の気持ちについて……」

陸はポケットからココアシガレットを取り出して口に啜えた。すると……

ジュンヤ「ここにいたのか、半日とは言えスタジオに戻らないから」

陸「心配かけたか？すまねえな。ここの海沿いの公園、富士山が良く見えるんだ。どうしても写真欲しくってさ」

ジュンヤ「道理でGPSの表示が変な位置で止まってたわけだね」

ジュンヤは陸に紙袋を渡す。

陸「昼ごはん、まだだったよね。ベーコン・ポテトサンドと紅茶持ってきたよ」

陸「悪いな、頂くぜ」

サンドをにかぶりつき、紅茶を飲む陸の顔にチーズソースがついている。

ジュンヤ「口汚れてるよ」

ハンカチで口元を拭かれると陸はツツコム。

陸「そういうのは男が女にやるもんだぜ、変に誤解を招くぞ」

ジュンヤ「ごめん、そう言うつもりじゃないけど陸って案外そういうの初心だと思う

から分からないかなって」

陸「そもそも恋愛経験ゼロの俺は千歌の考えはある程度分かるけどちゃんとそれに応えられるか……」

ジュンヤ「陸って案外本心とかガラスみたいだね、すぐに壊れそう」

陸「言われたくなかったな、それ……」

ジュンヤは陸を見て密かに伝えた。

ジュンヤ「頑張れ、陸」

一方でスタジオでは

ルビィ「ジュンヤさん買い出し遅いね。桃ゼリー早く食べたいな」

花丸「ポテチのバターはちみつまだずらく」

竜太郎「花丸ちゃん、パン食べながら言うセリフじゃないぞ」

アラタ「連絡付いたよ、今、陸を見つけたらしいから買い出しと一緒に連れて来て。今スタジオに向かってるよ」

ルビィ「じゃあもうすぐだね！」

東京 デイスク・ドール・シンフォニクス事務所。

赤峰「心咲君、ここの所仕事を背負い込んでないかな？」

事務所の机でグラスにウイスキーを注ぐ。

心咲「確かに、家に帰れないのは不満です。後俺は酒飲めないから」

赤峰「まあ、飲んでみたまえ」

心咲「少しだけですよ」

グラスを手にウイスキーを飲むと……

心咲「つてこれ麦茶じゃん。前と同じ引つ掛けですか……」

赤峰「無理に酒を進めるつもりは無いと前に言ったんだがね」

心咲「せめてコップはグラスにしないでください。後ロツクの氷も紛らわしいから」

赤峰「まあ、細かい事は気にせず、折角朗報持ってきたんだからさ」

心咲「朗報？」

赤峰は週刊雑誌を取り出し、開くとそこに記事が載っていた。

心咲「アクアの優勝を心咲護が祝福、新世代のアイドルを見抜いた王の素顔……か」

赤峰「雑誌メディアも大きく彼女たちを注目している。うちの事務所にも一人でもメン

バーが来れば大きな効果になるんじゃないかな？」

心咲「確かに、アクアは俺たちにとつても大きな高校生芸能の逸材に見える。ただそ

れは彼女たちが明確にそれに目を向けられるかも大きな問題だ」

赤峰「君は高海千歌をその世界に誘おうとしたんじゃないかな？結果は？」

心咲はそのことについて笑みを浮かべて答えた。

心咲「俺は彼女の事について、大きな理由を知っている。その理由はきつと高海さんにとつて無くてはならない大事な物。俺は高海さんのスカウトする以前にその人物に誘いをかけたんだ」

赤峰「あの、カメラの少年。黒猫団の海道陸君だね」

心咲「以前そのことについて彼から返信が来た。ディスク・ドール・シンフォニクスのカメラスタッフとして所属する事が決まり、高海さん本人もついていくらしい」

赤峰「流石じゃないか、きつと大いに高校生芸能に貢献してくれるよ!!」

心咲「若者の未来と夢を応援し、それを見届ける。王として彼らの手を握っていくのは当たり前ですから」

赤峰「それと、君にもう一つ。伝えたい事ある」

心咲「他にも?」

赤峰「3月の一週目だけ、君に休暇が許された」

心咲「休暇!!一週間の!!」

赤峰「これを機に、少しは家族との時間を過ごしてはいかがかな?お子さんも今年入園式じゃないか?」

心咲は余りの嬉しさに電話をする。

心咲「久しぶり、穂乃果ちゃん」

穂乃果「護君、やっと連絡取れたく仕事は？」

心咲「それよりも聞いて、3月の一週目。帰れるよ、家に」
心咲の一年の始まりに光が照らされた瞬間だった。

第25話 桜の訪れを終わりの前に

アラタ「わざわざごめんね、桜巡りに付き合わせて」

陸「そんな事ないぜ、キツチリ3年生の思い出写真に収めるのは後輩の仕事だろ」

果南「頼もしい、やっぱ陸君連れてきて正解ね」

鞠莉「連れ回した分新作スイーツで恩を返します。OK♪」

劍崎「賄賂じゃん……」

ダイヤ「それなら桜巡りの後はホテルオハラでティータイムですわね♪」

カガリ「キラーン!!」「甘い物!!」

陸「新作スイーツ食えるなら来て正解だったな」

鞠莉「それよりも千歌っちの事、見てあげたらどうデスカ。後ろで黒いオーラを立て

てますけど♪」

陸「!!ッ」

陸が振り返ると不機嫌そうに千歌がベンチで座っている。

千歌「陸君、さっきから私の事避けてるよね?」

陸「ああ、ご、ごめん……」

陸は気まずそうな空気の中で千歌に謝ると千歌は席を立ち、陸の腕を掴む。

鞠莉「わお♡」

陸「千歌、胸が……当たるんだけ……ど……ど……」

千歌「これから3つ、約束がある、一つは私から目を背けない事、二つは手を離さない事、最後は、私の写真は必ず陸君と二人だけで撮る事。わかった」

3つのオーダーを聞くと陸は千歌の手を握る。

陸「慣れないけど、出来る限りそれに従う」

千歌「それでいいよ」

ダイヤ「以外に独占欲強いですわね」

果南「陸君の戸惑う顔とか最高だよね」

カガリ・アラタ「女の子って、怖い……」

その後、桜巡りが始まる。

5つの桜の名所を巡りながらスタンプを集めていく。

その過程で陸はカメラで写真を撮影する。一つ目の桜の名所では……

剣崎「桜って日本刀が映えるよなー」

鞠莉「扇も用意してナイスですよ」

果南「思いっきりドソキホンテンのレプリカだけど」

アラタ「よく見たらプラスチックにメツキ塗料塗っただけだ」

二つ目

陸「こいつはどうだ？」

カガリ「桜と言ったら団子だよね♪」

ダイヤ「緑茶をカガリさんから頂きました」

劍崎「甘党は結局桜よりも団子か」

鞠莉「持つてるお茶は六右衛門デスね。ナイスカガリさん」

3つ目

陸「大胆だなあこれ」

アラタ「想像以上に恥ずかしかった……」

果南「お姫様抱っこ、夢だったんだよね〜」

鞠莉「尊すぎて直視できませ〜ん!!」

劍崎「メガボドボドダー〜!!」

4つ目の桜の名所に来ると……

陸「それじゃあ、俺の方も頼めるかな？」

陸はアラタにカメラを渡す。

アラタ「任せて」

陸が桜の前に立つと千歌が陸に寄り掛かる。

陸「お、おい……」

千歌「このままお願い」

アラタは顔を赤くしつつシャツターを切った。

桜巡りを終えてホテルに來たが鞠莉の計らいで千歌と陸は二人きりになった。

とは言えその周りに監視する様に3方向に3年生が座っているが。

アラタに渡されたカメラには恋人のように寄り添う千歌と慣れなそうな陸の写真。

その様子を見て陸の心拍数が上がっていた。

ダイヤ「この写真、いくらで売ってくださいます?」

陸「裏取引するつもりはねえよ、この写真は俺と千歌だけの……えつと……」

その言葉に盛大なニヤニヤを見せるメンバー。

果南は陸に指摘する。

果南「陸君って、案外千歌の事になると暴走するタイプだね」

陸「そ、そりゃあ誰だつて一緒にいた女を渡したくないだろ!!」

千歌「!!」

鞠莉「キヤー!!」

陸「ち、違うんだ千歌!! そう言う訳じゃ、な、無くてただ……」

千歌「わ、渡したくないって……」

陸「ああ……」

本心が丸見えになった陸、それに対して千歌は陸に聞く。

千歌「陸君は、私の事をそう思ってるの……」

陸は一瞬固まるが返すべきと思ひ、答える。

陸「俺でも、千歌の事は大切に想ってるんだぜ。でも、俺はまだそういう関係になるのは早いと思うんだ。今は伝えられない、ごめん……」

千歌は顔を赤くして陸に伝える。

千歌「それなら、早く言つてよ。期待してたんだから……」

ダイヤ「すみません、ブラックコーヒーを。砂糖が頭を支配してます」

カガリ「カフエモカお願いします。良いスイーツが目の前に」

千歌「ちよつとみんな!! 私達で遊ばないでよ!!」

陸「とてもじゃないけど視線が痛い!!」

剣崎「あの二人、羨ましいな」ニヤニヤ

アラタ「後輩が幸せそうで何より」ニヤニヤ

千歌「場所変えるぞ、居れたもんじゃない!!」

千歌「きやッ!!」

陸「あ、ごめん!!」

千歌「強引だよ……」

陸「向こちらの席、空いてるから行こうか」

意識し始め、お互いは手の温もりに胸を高鳴らせる。

千歌（陸君が私を見てくれる、それだけでも嬉しい。でもまだ友達の関係、陸君はいつ、私を好きって言うてくれるかな？）

陸（俺にとって、千歌はずっと俺の近くに居てくれた。知らない内に惹かれていた。こうして千歌が俺を求めてくれるだけで、俺も頑張ろうと思つた。この関係を友人から、恋人に変えよう。俺が、必ず伝える）

カガリ「いつまで手を重ねてるのかな？」

陸「か、カガリ!!」

ダイヤ「ついて来ててしまいましたわ。ごめんなさい」

陸と千歌はお互いの目を合わせて声を合わせた。

千歌・陸「見ないでくださーい!!」

第26話 海色の二人 重ねる心……

東京 ディスク・ドール・シンフォニクス事務所

赤峰 「今頃音ノ木坂は卒業式だな。一年は早い物だな」

赤峰の後ろで心咲は缶コーヒを開ける。

心咲 「この一年間で才能ある若者たちは多くの物を学んだ。この先芸能社会の大きな舞台に立つ彼らを多くの芸能事務所が欲しがらるだろうね」

赤峰 「次の候補生も多く集まっている、今回も音ノ木坂から4人の候補生がいる。君にとつていい候補生が見つかるといいが……」

心咲は候補生のリストを手に取り、心咲は呟く。

心咲 「男女ともに強者ぞろいだな。これなら作れるはずだ」

赤峰 「昨日の提出書類の、確か革命派……だったかな？」

心咲 「この先、高校生芸能はありふれたコンテンツになるだろう。それは生存競争の大きな世界になっていくはずだ。その生存競争の抑止力として革命派が必要になってくる。その為に世間はディスク・ドール・シンフォニクスの存在を必要とするそんな逸材を作らなければならない」

赤峰「次の世代に続く、新たな王の眷属。君はそれを求めてるんだね」

心咲「次の世界が求める、新しい配下を俺が選び、導かなければならない。王としての自分はそのためにいる」

赤峰「やってみなさい、王の思うがままに」

赤峰は心咲にそう伝え、グラスにウイスキーを注いだ。

そして黒猫団とアクアは

浦の星卒業式で……

千歌「果南ちゃん、卒業おめでとう!!」

曜「大学に行っても応援してるよ!!」

果南「ありがとう、時には私の家に遊びに来てね」

千歌・曜「勿論!!」

ルビィ「お姉ちゃん、卒業おめでとう。大学でもがんばルビィ!!」

花丸「ダイヤさん、ルビィちゃんはマルがしっかり守るぞら!!」

ダイヤ「頼もしいですわ!!ルビィも私が留学しても、しっかりするんですよ」

ルビィ「ジュンヤさんがいるから大丈夫、任せルビィ!!」

花丸「バリエーション増えたぞら!!」

梨子「鞠莉ちゃん、卒業しても私達と一緒に遊ぼうね」

善子「この愛の鎖で繋がれている限り、再び相まみえる時が来る事は避けられない。それを覚えていて」

鞠莉「勿論、必ずカムバックします。その時はアクアも黒猫団も皆でパーティーしましょ」

梨子「約束だよ」

善子「来世で会おう、我がリトルデーモンよ!!」

梨子「ブレないなあ……」

流星苑高校卒業式

陸「我等黒猫団、在校生組!!」

1、2年生「ハア!!」

陸「アラタ先輩、カガリ先輩、真田先輩。卒業しても心は永遠、黒猫団の偉大なる三皇帝に俺たちはエールと今後の大成を祈って、俺達は今後も黒猫団と流星苑高校を引っ張っていきます。3年間の高校生活、お疲れさまでした!!」

1、2年「お疲れさまでした!!」

アラタ「ありがとう、皆」

剣崎「粋な送り出しだな。安心した」

カガリ「タスキは繋いだよ、君たちのこれからを祈る」

陸「ありがとうございます!!」

仁乃介の実家 板前寿司 火流院

陸「3年生に、栄光あれー!!!」

全員「カンパーパーイ!!」

卒業式後、板前寿司 火流院に集まり、豪華絢爛なちらし寿司で3年生を祝った。このために火流院の板前さんが気合い入れて作ってくれたらしく伊勢海老やアワビと言った普段食べれない物がたくさん入っている。

陸は山盛りのちらし寿司を幸せそうな顔で頬張っていた。

その横で千歌はタツパーを持ってソワソワしている。

鞠莉「千歌っち、そのタツパーは何かしら?」

千歌「あ、こ、これは……」

陸「千歌が持つてるそれって、お前ちらし寿司を持って帰ろうとか思ってるんじゃないのか?」

千歌は頭を振って、否定すると陸に打ち明ける。

千歌「陸君が好きだって言ってたから、作ってみただけど……」

千歌はタツパーを開ける。

陸「それって……」

千歌「手作りチョコレートチャンク。食べてみてくれるかな？」

千歌の顔を見て何かを察した陸は千歌にこう伝える。

陸「それ、後でもらうよ。ちよつと場所、変えようか？」

千歌が頷くと陸は鞆と制服を背負う。

陸「悪い、席外すけどいいか？」

鞠莉「それなら構いませんけどハアハアハアハア」

ダイヤ「ガスツ!!」
「気にせず行つてください、気絶してるうちに」

陸・千歌「あ、ありがとう……」

仁乃介「頑張れよ、陸……」

善子「何で手錠かけられるのよ!!ただ外に行くだけなのに!!」

花丸「これじゃあ、ちらし寿司食べれないぞー!!」

ダイヤ「あの二人を偵察しようという魂胆は読めています。しばらく大人しくして

てください」

仁乃介（ちよつとかわいそうだが、ダイヤの姉貴、グツジョブ!!）

陸「この公園、富士のよく見える名所なんだ。日差しも当たって気持ちがいいだろ」

陸はそう言つてチョコレートチャンクを口にする。

千歌「上手に出来てるかな？初めてなんだけど……」

陸「店で売ってる物よりも断然うまい、よく出来てる」

千歌はその言葉に胸を撫で下ろすと千歌は陸に尋ねる。

千歌「陸君は、いつディスク・ドール・シンフォニクスに行くの？」

陸「事務所に候補生として志願した。東京に出るのは、来年の夏ぐらいかな？」

千歌「それなら、私も荷物纏めないと」

陸「本気で付いてくのか？」

千歌「陸君の出来ないことは私がやりたいから」

陸「何もそこまで……のわっ!!」

身体を抱かれ、千歌は涙ながらに伝えた。

千歌「離れるのは嫌だ!!陸君に絶対、お嫁さんにしてもらうんだから!!」

陸「千歌、お前……」

千歌「はっ!!」

感情に任せて言った言葉に千歌の身体は体温が上がっていく。

千歌「こ、これは、その……」

陸は千歌の言葉に陸は笑みを浮かべる。

陸「両想い、か……」

千歌「え……」

陸「俺も、心のどこかで千歌を想っていた。自分の側に居てくれることに凄く、幸せを感じていた。でも、俺みたいな面倒な人間が千歌と一緒にいたら、きつと迷惑ばかりかけちゃうと思うって。ただ、今気づいた。千歌が俺と同じ思いで、支えてくれるなら。こんな俺だけ……」

俺の恋人になつてくれないか？」

千歌は陸の本心を聞いて、陸に答えを伝える。

千歌「ありがとう、私を、陸君の恋人にしてくれて。それに、私も陸君と似た者同士だから。気にする必要、無いんだよ」

陸「ありがとう、千歌……」

二人を祝福するかの様に桜が揺れ、二人は唇を重ねた。

何気ない始まりから夢を見届けた陸
純粹な憧れから夢を追い続けた千歌

その果てに辿り着いた幸せの形

この先どんな苦勞があつても

二人は進んでいけるだろう

この先も二人が

桜の季節を何度も迎えて

笑顔でいられる

そんな未来へと続いていく……

END